

2017年度 まちづくり戦略会議

# 「ボートのまち」の未来を見据えた まちづくりに関する研究

戸田市まちづくり戦略会議

2018年3月

# 目 次

## 第1章 はじめに

- 1.1 研究背景
- 1.2 研究目的
- 1.3 研究方法
- 1.4 本提言書の概要

## 第2章 戸田ボートコースの歴史及び今後の動向

- 2.1 幻のオリンピック～1964年東京オリンピック
  - (1) 戸田ボートコースの誕生
  - (2) 1964年東京オリンピックの開催
- 2.2 1964年東京オリンピック開催後～現在までの戸田ボートコース利用状況
  - (1) 戸田ボートコースの利用状況
  - (2) 戸田ボートコースの課題
- 2.3 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた動き
  - (1) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定
  - (2) 海の森水上競技場の新設による戸田市への影響

## 第3章 戸田ボートコースと市民・市との関係性

- 3.1 市民と戸田ボートコース及びボート競技者との関わり
  - (1) 各種調査結果より
  - (2) 町会・自治会インタビュー及びアンケート調査結果
- 3.2 市と戸田ボートコースとの関わり
  - (1) 戸田ボートコースを利用した取組
  - (2) 職員アンケート調査結果
- 3.3 小括

## 第4章 スポーツを通じたまちづくり事例

### 4.1 「ボートのまち天竜」

ースポーツ拠点づくり推進事業を活用した「ボートのまち」

### 4.2 「サッカーのまち藤枝」

ードリームプラン2014～歴史・誇り・夢あふれる「サッカーのまち藤枝」

## 第5章 「ボートのまち戸田」として愛され続けるために

### 5.1 「ボートのまち」としての今後の在り方

### 5.2 「有形・無形のレガシー」を目指して

## 第6章 おわりに

## 第1章 はじめに

### 1.1 研究背景

2013年9月の国際オリンピック委員会において、2020年に東京でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催することが決定された。戸田市には、前回東京オリンピック競技大会のボート競技の会場となった「戸田ボートコース」があり、2020年も戸田市でのボート競技開催に向けて準備を進めてきた。具体的には、ボート・カヌー競技大会の誘致に向けて、2016年10月に文化スポーツ課を母体とする戸田市オリンピック・パラリンピック検討プロジェクトチームを発足させるなど、国や県などに働きかけを行ったところである。しかし、ボート・カヌー競技会場の候補に挙がっていた「彩湖」は候補地から外れ、最終的に「海の森水上競技場」に決定した。

そこで、今後可能性のある「事前キャンプ地」や「聖火リレーの誘致」に向けて、2017年4月に文化スポーツ課内にオリンピック・パラリンピック担当を設置し、更に庁議メンバーで構成する戸田市オリンピック・パラリンピック事業推進本部を同年6月に立ち上げたところである。また、この他にも実際の調整機関や実施機関として、同事業実行委員会を立ち上げるなど、事業の推進を目指している。

一方で、戸田市において本大会の開催がされない中で「ボートのまち」として継続していくことの難しさや、戸田市において東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の関連事業をどのように実施していくのかなど、市民協働を進めていくうえで早期に決定をしなければならないという課題も抱えている。

前回の東京オリンピック競技大会から、戸田ボートコースは「有形のレガシー<sup>1</sup>」としてここまで戸田市の地域資源となり、公園としての機能やボート専用コースとしての機能を有した場所であることから、ボート関係者から愛されてきた。今後は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として有形のレガシーのみならず、「無形のレガシー」としても市民やボート関係者に愛され続け、自慢の場所として継承されていくためにも「ボートのまち」としての在り方等について研究する必要がある。

### 1.2 研究目的

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催後、戸田ボートコースはオリンピックのボート競技を開催した日本における唯一無二の場所ではなくなってしまう

---

<sup>1</sup> 本提言における「レガシー」とは、広義のオリンピック・パラリンピック競技大会後も長期間にわたってもたらされる影響を示している。「有形のレガシー」は、目に見えるハード整備での過去から継承される遺産を指し、「無形のレガシー」は、社会的な一体感の醸成や市民の愛着心の向上など、ソフト面の影響を意味する。

う。そのため、1940年の戸田ボートコース完成以降70年以上にわたり歩んできた「ボートのまち」としてのレガシーを継承していくためにも、今後の在り方等を含めて検討する必要がある。

そこで本研究では、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会後の「ボートのまち」の未来を見据えたまちづくりに向けて、以下の3点を明らかにすることを目的に実施する。

- (1) 戸田ボートコースの歴史や戸田ボートコースの利用状況等を調査することで、戸田ボートコースが戸田市に与えている影響を把握する（過去～現在）。
- (2) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に伴う海の森水上競技場の新設などによる戸田市への影響をまとめる（現在～東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会）。
- (3) 市民やボート関係者から（有形・無形の）レガシーとして、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会後も「ボートのまち」として愛され続けるための今後の方向性を明らかにする（東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会以降）。

### 1.3 研究方法

本研究は、分野横断的な内容であることからまちづくり戦略会議の研究テーマとし、以下の4点の方法にて研究を実施する。

- (1) 文献・Web等調査（事例調査、中期的な外部環境調査）

文献調査や既存の資料を収集するとともに、本研究に関係する事例等について調査する。また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に伴う海の森水上競技場の新設による戸田市への影響を調査する。

- (2) 文献調査・委員によるデータ収集（戸田ボートコースの利用状況調査）

これまでの戸田ボートコースの歴史を調査する。また、戸田ボートコースの利用状況等について、まちづくり戦略会議の委員が所管する部局からデータ収集などを実施する。

- (3) 文献調査・アンケート調査（市民、職員等の「ボートのまち」の認識調査）

既存調査に加えて、町会・自治会や職員の意識調査などから、市民や職員が戸田ボートコースやボート競技にどれだけ関心があるかを調査し、戸田市における「ボート」のブランド力を把握する。

- (4) 委員による議論（「ボートのまち」としての今後の方向性の検討）

上記（1）から（3）を検証し、「ボートのまち」としての在り方や今後の方向性について検討する。

## 1.4 本提言書の概要

本報告書は、第1章から第6章で構成する。

第2章では、戸田ボートコースの歴史や今後の動向について「過去」「現在」「未来」のそれぞれを時間軸において整理し、2020年以降の状況について検討する。

第3章では、戸田ボートコースと市民や職員との関係性について、各種調査結果や町会・自治会に対する調査を通じて分析する。また、職員アンケート調査を実施することで課題を明らかにする。

第4章では、スポーツを通じたまちづくり事例として、「ボートのまち天竜」と「サッカーのまち藤枝」の取組をまとめ、戸田市での導入可能性について検討する。

第5章では、前章までの研究結果を踏まえ、今後の「ボートのまち」としての在り方の方向性を提示する。

最後に、第6章として本研究の総括をする。

## 第2章 戸田ボートコースの歴史及び今後の動向

### 2.1 幻のオリンピック～1964年東京オリンピック

#### (1) 戸田ボートコースの誕生

1937年2月8日、東京オリンピック大会競技場決定委員会は「ボートレース・コースは戸田が第一候補に決定した」と発表し、同年5月30日には起工式が挙行された。そして工事は急ピッチで進んでいった。

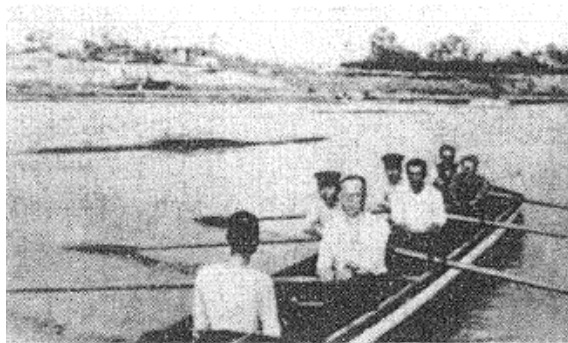
戸田ボートコースの工事に従事した人数は、総延べ人数で230,000人であった。また、工事では経費節約のため浦和刑務所の受刑者が仮監所を堤外地に設置し、随時300から600人が工事に従事し、着工から完成まで3年5カ月あまりの工事期間中に延べ約143,000人が従事したと言われている。しかし、日中戦争が長期化するなど国際情勢により開催地を返上せざるを得なくなり、オリンピック東京大会は中止され「幻のオリンピック」となった。

しかし、この工事と同時に進められていた排水路工事は水害を一掃し、湿地帯を換地して、埼玉県南の工業都市を造成する土地区画整理事業という永続的な繁栄を目指したものであったため、工事規模は縮小し続行された。その後、1940年10月31日に竣工式を迎え、幻のオリンピックの遺産である戸田ボートコース（全長2,400m、幅員70m、水深2.5m）が誕生した。

写真1：大学生による労働奉仕の様子



写真2：完成後の戸田ボートコース



出典：「戸田市史通史編」下巻（p395・p.398）

#### (2) 1964年東京オリンピックの開催

1959年5月26日、ミュンヘンで行われた第55次オリンピック委員会総会において、東京がオリンピックの開催地として決定された。その結果、戸田町（当時）が再びボート競技の開催候補地に浮上した。戸田町としては、オリンピックの開催により町の財政悪化を招かないように国と県との折衝を続け、1962年9月18日に埼玉県と戸田町の間

で受入れに係る覚書を交わした。そして同年 12 月には改修工事の起工式が挙行政され、ボートコースは 20m 拡幅され周辺施設が整備された。

1964 年 10 月 11 日、戸田オリンピックボート会場に聖火が灯され、参加国 27 か国 380 名の選手たちによって、5 日間わたる東京オリンピックボート競技の熱戦が繰り広げられた。

図表 1：広報戸田による東京オリンピック特報記事



【出典：広報戸田 昭和 39（1964）年 11 月 No. 52】

## 2.2 1964 年東京オリンピック開催後～現在までの戸田ボートコース利用状況

### (1) 戸田ボートコースの利用状況

1964 年の東京オリンピック以降、戸田ボートコースを日常の練習場として利用するボート競技者は急激に増加した。また、戸田ボートコースを会場とする大会も増え、コースは慢性的な過密状態となった。

この背景には、かつてボートの中心であった隅田川本流の水上交通が混在し、甚だしい河川の水質汚染があり、加えて向島地域の東岸に水害対応の護岸と高速道路が完成したため艇庫群がその機能を失ったことが要因のようである。そのため、東京の漕艇団体

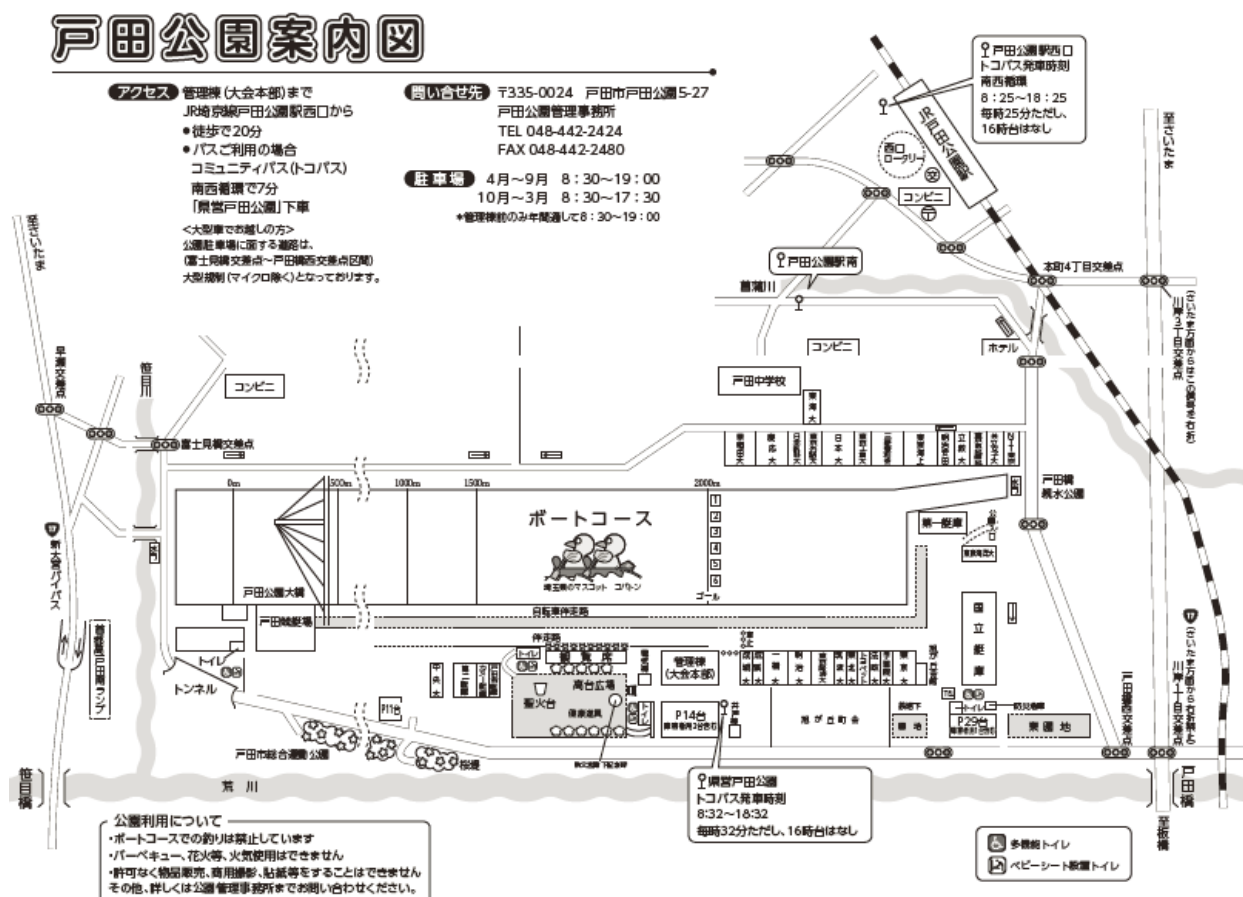


は相次いで戸田ボートコースに本拠地を移し、今日の艇庫群が誕生した。

現在、戸田ボートコース周辺には図表2のように多くの大学や企業等の艇庫がある。まず、北側には、早稲田大学、慶應義塾大学、日本医科大学、東京外語大学、東海大学、日本大学、東京工業大学、(公財)三菱養和会、東京海上日動、明治安田生命、立教大学、東京医科歯科大学、共立女子大学、NTT東京の14あり、東側には東京海洋大学、県立第一艇庫、国立艇庫の3つある。また、南側には、中央大学、県立第二艇庫、カヌー艇庫、戸田市立艇庫、成城大学、成蹊大学、一橋大学、明治大学、東京経済大学、筑波大学、東北大学、東京トヨペット、法政大学、学習院大学、東京大学の15の艇庫があり、合計で32の艇庫が戸田ボートコースの周辺を囲んでいる状況である。

さらに、戸田ボートコースの水面を利用する団体は、上記の艇庫を保有する団体だけではなく、大会が近づくと多くの出場チームが長期間にわたる練習日程を確保して戸田ボートコースを訪れ、コース内は多くの艇であふれている。

図表2：戸田公園案内図



出典：公益財団法人埼玉県公園緑地協会ホームページ  
[http://www.parks.or.jp/koen\\_main/toda2.html](http://www.parks.or.jp/koen_main/toda2.html) ) 2017年11月9日検索

続いて、全国のボート場についてまとめる。

公益社団法人日本ボート協会（以下「日本ボート協会」という。）によると、2016年度の全国公認コースとしては図表3・4のとおり全国で46コースとなっている。日本ボート協会のコース規格規定<sup>2</sup>としては、第4条において「認定等級は全日本級大会及び地域予選会に供されるコースでは上位順にA級、B級、C級の3等級とし、それら3等級に該当しないコースでも安全上の重大な瑕疵がないと認められた普及目的のコースはF級とする。」と定められている。

図表3：全国公認コース（2016（平成28）年度版）位置図



出典：地理院地図を加工して作成

<sup>2</sup> 第4条では、「①国際大会は、A級コースで行う。②全日本選手権の各大会及び国民体育大会ボート競技は、B級以上のコースで行う。③地域予選会はC級以上のコースで行う。④F級コースでは、全日本級大会及び地域予選会を除くその他の競漕会及び競争行事等を開催することが出来る。」と規定されている。

図表 4 : 全国公認コース一覧 (2016 (平成 28) 年度版)

都道府県	コース場名	ダム湖	級	レーン	距離	所在地
北海道	茨戸漕艇場		C	3	1,000	石狩市生振 367
北海道	網走湖ボートコース		C	4	1,000	網走市字呼人 25-1 地先
青森県	新田名部川ボートコース		C	3	1,000	青森県むつ市苫生町 2 丁目
岩手県	岩手県立御所広域公園漕艇場	○	B	6	2,000	岩手県盛岡市繁字除キ 4-1
岩手県	岩手県花巻市田瀬湖ボートコース	○	B	8	2,000	岩手県花巻市東和町田瀬
岩手県	錦秋湖漕艇場	○	C	4	1,000	岩手県和賀郡西和賀町川尻地内
宮城県	長沼ボート場	△	A	8	2,000	宮城県登米市迫町北方字天形池内
秋田県	大瀧漕艇場		B	4	1,000	秋田県南秋田郡大瀧村字西野 170-1
山形県	京田川ボート場		C	3	1,000	山形県酒田市宮野浦
福島県	福島県菅荻野漕艇場	○	B	6	1,000	福島県喜多方市高郷村大字上郷字魚筍洲丙 292-1
茨城県	潮来ボートコース		B	6	1,000	潮来町
栃木県	谷中湖ボートコース		B	6	1,000	栃木県藤岡町渡良瀬遊水地谷中湖
群馬県	城沼ボートコース		C	5	1,000	群馬県館林市花山町
埼玉県	戸田ボートコース		A	6	2,000	埼玉県戸田市戸田公園
千葉県	小見川ボート場		B	6	1,000	千葉県香取市小見川阿玉川地先
東京都	江戸川区荒川特設ボートコース		B	6	1,000	江戸川区平井 6 丁目地先～墨田区東墨田 2 丁目地
神奈川県	相模湖漕艇場	○	C	6	1,000	神奈川県相模原市緑区吉野字川原 641-4 (左岸) 神奈川県相模原市緑区若柳字尾房 1625 番外 (右岸)
山梨県	河口湖ボートコース		B	6	1,000	山梨県南都留郡河口湖町河口 3131 番地
新潟県	津川漕艇場	○	B	6	1,000	新潟県東蒲原郡阿賀町津川
長野県	下諏訪町漕艇場		B	6	1,000	長野県諏訪郡下諏訪町 10615 番地 8
富山県	富山県漕艇場	○	B	6	1,000	富山県富山市岩稲 富山県富山市芦生・牛ヶ増 (神通川・北陸電力榑神二ダム調整池)
富山県	南砺市菅桂湖ボート場	○	B	6	2,000	富山県南砺市桂字大沼 1-40
石川県	津幡漕艇競技場		B	6	1,000	石川県河北郡津幡町末川尻ほ 27-2
福井県	久々子湖漕艇場		B	6	1,500	福井県三方郡美浜町久々子
静岡県	天竜市菅ボート場 2000m コース	○	B	6	2,000	静岡県浜松市天竜区月 969-1
静岡県	佐鳴湖漕艇場		C	8	1,000	浜松市西区入野町 19954～251 地先
愛知県	愛知池漕艇場東郷コース	○	B	6	1,000	愛知県愛知郡東郷町大字諸輪地内
三重県	奥伊勢湖漕艇場	○	B	4	1,000	三重県多気郡大台町弥起井
岐阜県	川辺ボートコース	○	B	6	1,000	岐阜県加茂郡川辺町中川辺 1518-4
岐阜県	木曾三川公園コース (長良川国際ボートコース)	大堰	A	10	2,000	岐阜県海津市海津町福江

都道府県	コース場名	ダム湖	級	レーン	距離	所在地
滋賀県	琵琶湖漕艇場		B	6	1,000	滋賀県大津市玉野浦 6-1
大阪府	大阪浜寺コース		B	6	1,000	大阪府高石市高砂 1 丁目
大阪府	大阪浜寺コース		C	6	2,000	大阪府高石市高砂 1 丁目
兵庫県	円山川城崎漕艇場		B	6	1,000	兵庫県豊岡市城崎町桃島 1057-1 教育委員会城崎分室
兵庫県	加古川市立漕艇場	大堰	B	5	1,000	兵庫県加古川市八幡町中条西
兵庫県	兵庫県運河浜山レガッタコース		F		250	兵庫県神戸市兵庫区
和歌山県	美山漕艇場	○	C	4	1,000	和歌山県日高郡美山村大字初湯川 2205-1
島根県	島根県さくらおろち湖ボート競技コース	○	B	6	1,000	島根県雲南市木次町北原、仁多郡奥出雲町佐伯
岡山県	百間川漕艇場	大堰	B	6	1,000	岡山県岡山市中区沖本地先
広島県	芦田川漕艇場	大堰	A	6	2,000	広島県福山市水呑町 4748
山口県	豊田湖ボートコース	○	B	6	1,000	山口県下関市豊田町大字地吉 39-1
愛媛県	玉川湖ボートコース	○	B	6	1,000	愛媛県今治市玉川町龍岡下 玉川ダム湖
福岡県	遠賀川漕艇場		B	6	1,000	福岡県遠賀郡遠賀町大字今古賀 513 番地
長崎県	形上湾ボートコース		B	6	1,000	長崎県長崎市琴海大平大平町 638-11
熊本県	斑蛇口湖ボート場	○	B	7	2,000	熊本県菊地市大字斑蛇口 525-5
鹿児島県	川内川漕艇場		C	4	1,000	薩摩川内市

出典：日本ボート協会ホームページ (<http://www.jara.or.jp/rower.html>) 2017 年 11 月 9 日検索

図表 3・4 を一見すると全国に公認コースがあり、都市部においても公認コースが多くあるように見える。しかし、実際には都市部にあるコースの多くは、レーン数や距離が少なく短かったり、特設コースとなっていたりするなど、大きな大会の開催は難しい状況である。このようななか、戸田ボートコースは日本随一の国際規格コースであり、純然たる静水コースとなっている。

また、この他の A 級コースとしては、宮城県の長沼ボート場（1998 年 4 月国際規格コース認定）、岐阜県木曾三川公園コース（長良川国際ボートコース）（1998 年 10 月認定）、広島県芦田川漕艇場（1998 年 10 月認定）の 3 つ整備されているが、都市部からは離れているため、戸田ボートコースが数多く利用されている。

図表 5 は、日本ボート協会の主催又は主管している競漕会のここ 5 年の開催一覧である。ここでは、年間 13 大会のうち、多くの大会を戸田ボートコースで開催していることがわかる。この中で、開催地が決定しているお台場レガッタを除く 2017 年度の大会をみると、12 大会中で 7 大会と半数以上が開催されている。また、国内大会以外にも、2014 年 5 月には 2014 アジアカップを戸田ボートコースで開催しており、戸田ボートコースが日本の中で中心的な役割を果たしていることがわかる。

図表5：日本ボート協会 主催又は主管競漕会（2013年度－2017年度）

大会名	開催地・コース				
	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
全日本軽量級選手権（2,000m）	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
全日本マスターズレガッタ （1,000m／500m）	愛知県 愛知池漕艇場	群馬県館林市 城沼ボートコース	島根県雲南市・奥出雲町 さくらおろち湖ボートコース	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
全日本ジュニア選手権（2,000m）	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場	熊本県菊池市 菊池市斑蛇口湖ボート場
お台場レガッタ（500m）	東京都港区 お台場海浜公園特設コース	東京都港区 お台場海浜公園特設コース	東京都港区 お台場海浜公園特設コース	東京都港区 お台場海浜公園特設コース	東京都港区 お台場海浜公園特設コース
全日本社会人選手権（2,000m）	宮城県登米市 長沼ボートコース	宮城県登米市 長沼ボートコース	宮城県登米市 長沼ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
全日本中学選手権（1,000m）	岐阜県海津市 長良川国際ボートコース	岐阜県海津市 長良川国際ボートコース	岐阜県海津市 長良川国際ボートコース	石川県津幡町 津南漕艇競技場	福井県美浜町 久々子湖ボートコース
全日本高等学校選手権（1,000m）	福岡県遠賀町 遠賀川漕艇場	山梨県富士河口湖町 河口湖漕艇場	兵庫県豊岡市 円山川城崎漕艇場	島根県雲南市・奥出雲町 さくらおろち湖ボートコース	宮城県登米市 アイエス総合ボートランド
全日本大学選手権（2,000m）	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
オックスフォード盾（2,000m）	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
全日本選手権競漕大会（2,000m）	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
国民体育大会ボート競技（1,000m）	東京都江戸川区 平井運動公園周辺流域	長崎県長崎市 形上湾ボートコース	滋賀県大津市 琵琶湖漕艇場	岩手県 田瀬湖ボート場	愛媛県今治市 玉川湖ボートコース
全日本新人選手権（2,000m）	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース	宮城県登米市 長沼ボートコース	埼玉県戸田市 戸田ボートコース
全国高等学校選抜ボート大会（2,000m）	静岡県浜松市 天竜ボート場	静岡県浜松市 天竜ボート場	静岡県浜松市 天竜ボート場	静岡県浜松市 天竜ボート場	静岡県浜松市 天竜ボート場

出典：日本ボート協会ホームページを加工して作成

このほか、戸田ボートコース及び国立艇庫については、ボート競技が味の素ナショナルトレーニングセンターでは対応できない競技であるため、「ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設」に指定されている。ここでは、各競技の選手強化活動のため、トレーニングや科学・医学・情報サポートの環境及び体制の高機能化やネットワークの強化、マネジメント体制の整備などが行われている。

## （2）戸田ボートコースの課題

前項（1）までの調査結果から、戸田ボートコースが日本のボート競技にとって非常に重要なコースであることがわかった。また、多くのボート関係者に利用されており、大学生をはじめ多くのボート競技者にとって、戸田ボートコースは欠かせない場所であり、非常に愛されている。まさに「有形・無形のレガシー」となっていると見える。

一方で、戸田ボートコースに課題はないだろうか。現在戸田ボートコースでは、「①コースの利用者が飽和状態になっていること（利用面）」、「②戸田ボートコースが南北に分かれているため、住宅地と南北に分断されていること（立地面）」、「③戸田ボートコースを含む戸田公園の管理が埼玉県であること（管理面）」などの大きく3つの課題がある。

①と②の利用面・立地面に関しては、新たな競技者が活用しにくいといった問題があり、市民が気軽に戸田ボートコースで漕艇を楽しむことができにくいという課題がある。日本ボート協会が発表している平成 29（2017）年全国レガッタ・ボート教室スケジュールでは、戸田ボートコースでの開催は一つも掲載がなく、他のボート場と比較すると明らかにボートを気軽に体験できる機会が少なく、市民がボートを身近に感じる機会をつくりにくい状況であることがわかる。また、戸田公園（南側）に行くためには東西に長い戸田ボートコースを回って行かないといけない。そのため、近くにありながら遠い場所となってしまう。

③の管理面では、1964 年の東京オリンピック以降、戸田ボートコースの管理を埼玉県が行っており、使用等に関しては、日本ボート協会、戸田競艇企業団、埼玉県都市競艇組合、文部科学省、埼玉県、公園の現場管理者等からなる、戸田漕艇場運営委員会において決定されている。そのため、戸田市が管理している状況にはないため、利用しやすい環境づくりに力を注ぎにくい状況となっている<sup>3</sup>。

以上の3点を大きな理由として、気軽に市民や市が利用することが難しい状況となっている。

## 2.3 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた動き

### （1）東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定

2013 年 9 月の国際オリンピック委員会において、2020 年に東京でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催することが決定された。戸田市には、前回東京オリンピック競技大会のボート競技の会場となった戸田ボートコースがあり、2020 年も戸田市でのボート競技開催に向けて準備を進めてきた。しかし、戸田ボートコースは現在のオリンピックの規格に照らし合わせると幅員が狭く、拡張することも難しい状況である。そこで、戸田市内にある「彩湖」への誘致を進めてきたが、最終的に候補地から外れ、「海の森水上競技場」に決定した。現在、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の海の森水上競技場での開催に向けて工事が着々と進んでいる。

この海の森水上競技場は、東京都江東区青海 3 丁目先に新たに建設されるボート場である。現時点のアクセスとしては、東京テレポート駅前からバスに乗り、「環境局中防合同庁舎前」下車徒歩約 20 分となっている。今後、海の森水上競技場の建設と同時

---

<sup>3</sup> 漕艇場ボートコースの使用者（学生、企業のアマチュアボード競技）は、日本ボート協会又はカヌー協会傘下の会員に限られている（原則一般貸しはしていない）。大会等の競技レース開催時のみ漕艇場使用料（利用料金）を払うことになっているが、それ以外では会員の選手が日本ボート協会の定める「戸田ボートコース航行ルール」のもとで自由に練習（無料）している。

なお、自由練習は、漕艇場の開館時間や休園日に関係なく、早朝から夜間まで行われている。

に道路築造も進んでいくため、新たなバス停の設置や駐車場の整備によりアクセスが向上するものと想定される。

なお、東京都オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のホームページによると海の森水上競技場の会場概要は以下のとおりであり、参考に紹介する。

**【会場概要】**

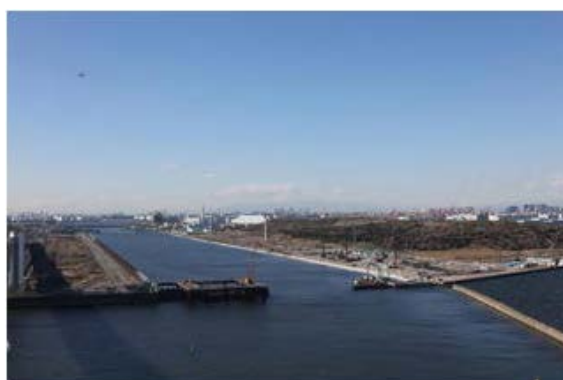
東京港中央防波堤内側及び外側埋立地間の水路に新しく整備される施設です。この場所は、豊かな緑で覆われた埋立地で、東京湾のすばらしい眺めとドラマチックな都市景観を一度に楽しむことができます。国際大会が開催できるボート・カヌーの競技場及び育成・強化の拠点とするほか、多面的な水面利用を図り、都民のレクリエーションの場、憩いの場としていきます。

図表6：海の森水上競技場（2016年5月時点）のイメージ図



出典：東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ  
(<https://tokyo2020.jp/jp/games/venue/sea-forest-waterway/>) 2017年11月9日検索

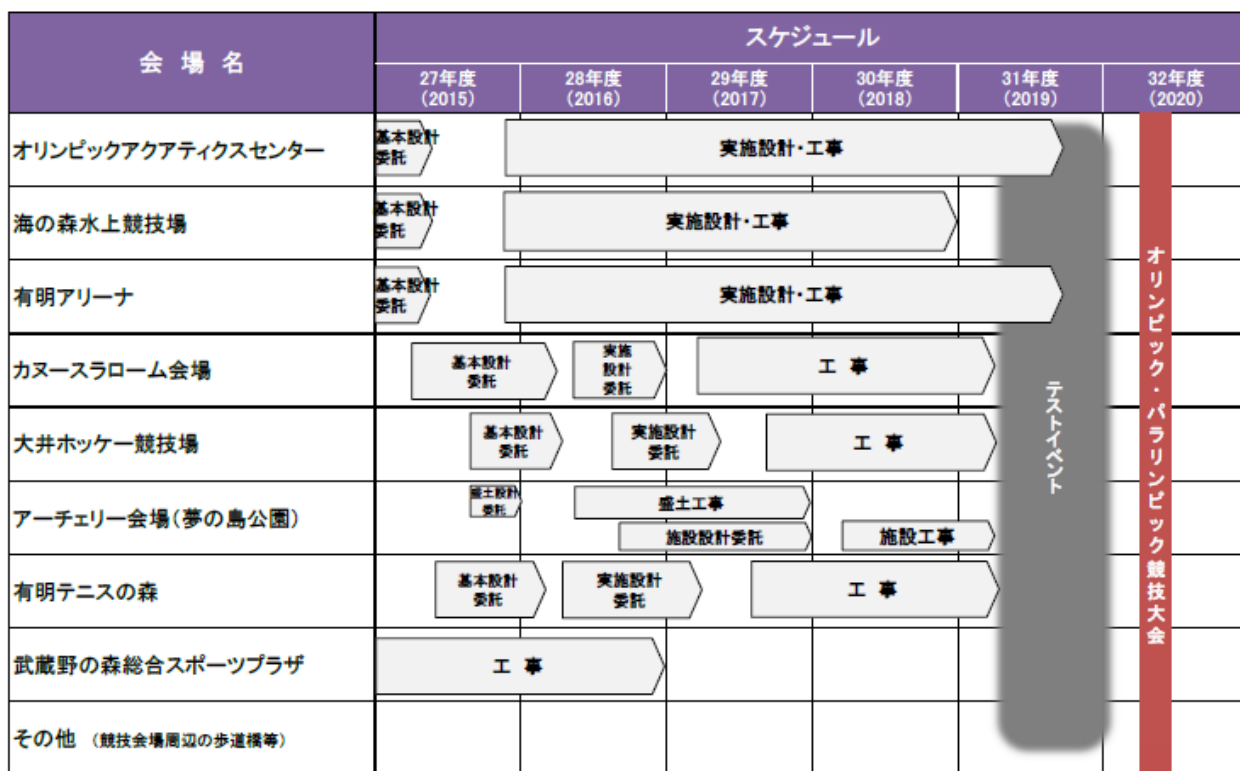
写真3：海の森水上競技場（2018年1月現在）の様子



出典：東京都オリンピック・パラリンピック準備局ホームページ  
([https://www.2020games.metro.tokyo.jp/taikaijyunbi/taikai/kaijyou/kaijyou\\_14/umimori\\_kouji/index.html](https://www.2020games.metro.tokyo.jp/taikaijyunbi/taikai/kaijyou/kaijyou_14/umimori_kouji/index.html)) 2018年3月1日検索

また、日本ボート協会は、2019年8月に世界ジュニア選手権を海の森水上競技場で開催することを承認し、翌年のテスト大会を兼ねることを決定した。今後は、海の森水上競技場での2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会ボート競技の開催に向けて進んでいく予定である。

図表7：新規恒久施設等の整備状況



出典：東京オリンピック・パラリンピック準備局ホームページ  
<https://www.2020games.metro.tokyo.jp/taikaijyunbi/torikumi/facility/kyogi/index.html> ) 2017年11月9日検索

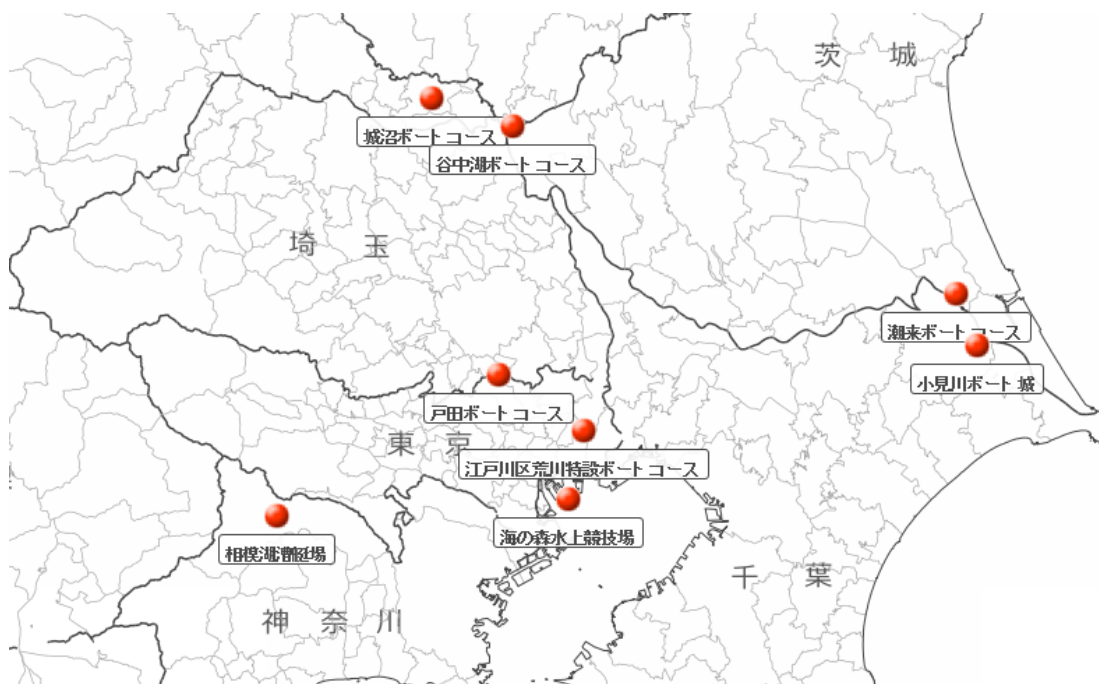
## (2) 海の森水上競技場の新設による戸田市への影響

前節(2.2)では、日本ボート協会の全国公認コースのうち、A級コースは全国で4つしかないこと、その中で関東近郊のボート場は戸田ボートコースしかないことなどを確認した。また、都市部からの交通の利便性を考えると江戸川区荒川特設コースが存在しているが、こちらはB級コースであり、1,000mの距離となっているため開催される大会や利用の制限があることがわかった。

このようななか、今回の海の森水上競技場が新設されると、図表8となるため関東近郊のボート場の設置状況が一変する。



図表 8：関東近郊の公認コース（2016（平成 28）年度版）等の位置図



出典：地理院地図を加工して作成

戸田ボートコースとしては、①交通の利便性、②国際大会が開催できるA級コース、③ボート専用コース、④オリンピックを開催した唯一のボート場、⑤コース周辺の艇庫群——など多くの強みがある。しかし、海の森水上競技場が新設されることにより、多くの強みが弱まることが考えられる。

まず、①交通の利便性としては、図表 8 のとおり位置だけを考えて場合、戸田ボートコースよりも都心部にあることがわかる。ただ、現状の交通のアクセス面からみると、電車での利用者にとっては不便な部分もあるが、車での移動を考えると道路や駐車場の新設などにより、戸田ボートコース以上に交通の利便性は高くなることが予想される。

続いて、②・③・④では、現在のオリンピック規格に合ったボート場が新設されるだけでなく、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催後、戸田ボートコースはオリンピックのボート競技を開催した日本における唯一無二の場所ではなくなってしまう。この点を考慮しても、かなりの影響があるのではないかと考えられる。

また、現在海の森水上競技場の利用計画としては、年間大会数を 30 大会の開催とし、利用者を 35 万人と想定している。しかし、年間 1 億 5,800 万円という巨額の赤字となることも予想されており、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催後、どのような活用を行っていくのかを注視していく必要があるだろう。

また、⑤では、過去を振り返ると戸田ボートコース周辺には初めから大学や企業が艇庫を構えていたわけではなく、他地域から移ってきたという経過があるため、海の森水

上競技場の誕生は多大なる影響を及ぼす可能性を秘めている。

以上のことから、今後の海の森水上競技場の利用方法によっても大きく変わるが、どのような方向性になったとしても、戸田ボートコースにとって大きな影響を及ぼすことが予想される。<sup>4</sup>

---

<sup>4</sup> 「Rowing・no.544」における日本ボート協会理事長の新年挨拶では、海の森水上競技場の2020年以降の利用として4つの柱①ボート・カヌーを中核とした「総合型地域スポーツクラブ」を設立する、②現在戸田にある強化拠点を海の森にシフトする、③全日本大会などを海の森水上競技場にシフトする、④国際大会を招致すること——を掲げている。戸田にある艇庫が全て海の森水上競技場に移転するわけではなく棲み分けが必要との補足コメントはあるが、日本ボート協会として海の森水上競技場を中心に考えていることが読み取れる。

### 第3章 戸田ボートコースと市民・市との関係性

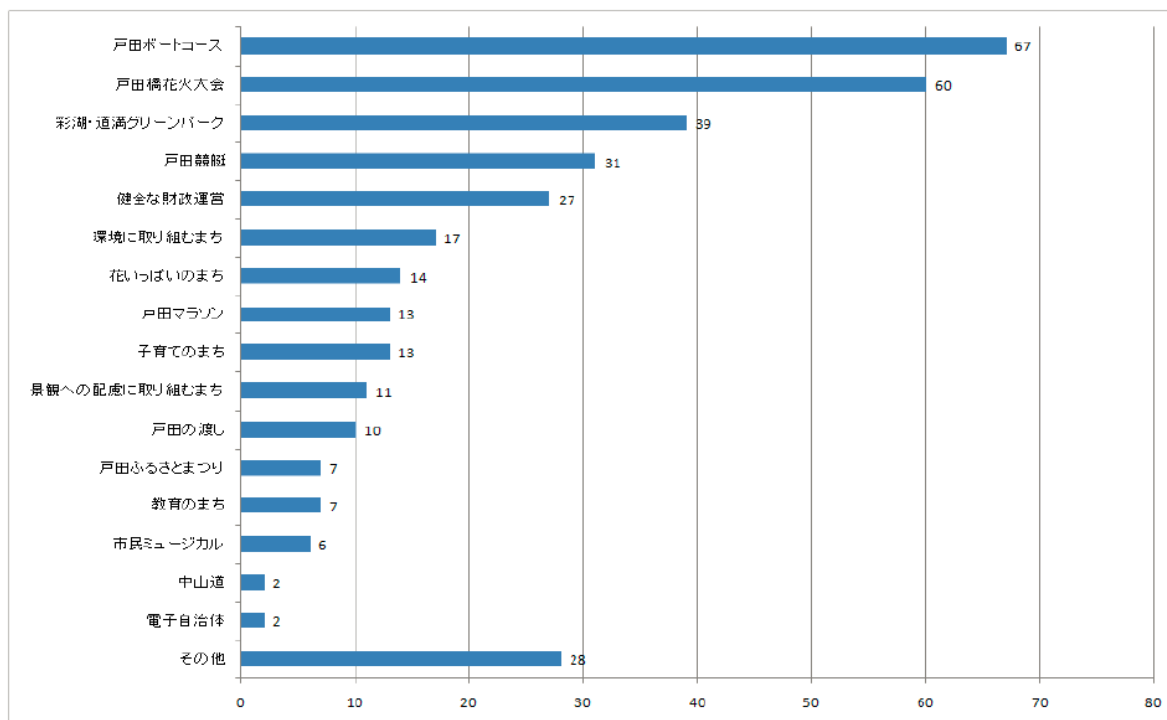
#### 3.1 市民と戸田ボートコース及びボート競技者との関わり

##### (1) 各種調査結果より

市民の戸田ボートコースやボート競技への関心や関わりについて、どのような状況であるかをまとめる。

まず、少し前の調査結果となるが、2008年度の戸田市政策研究所による「戸田市におけるシティセールスの必要性と成功する要件について」の調査研究では、図表9のとおり市民や職員に対して戸田市の地域資源を質問し、どの地域資源を重要視しているかの認識を調査している。

図表9：地域資源の集計結果



(回答総数=341 ※複数回答であることによる)

出典：戸田市におけるシティセールスの必要性と成功する要件について（2009年）

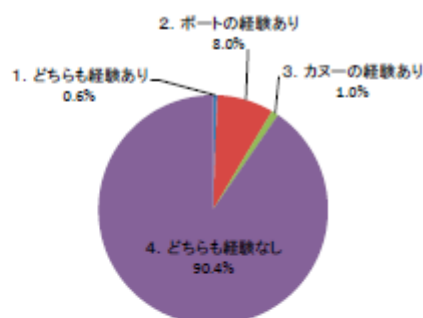
図表9の結果から、市民や職員にとって戸田ボートコースが最も地域資源として認識されていることがわかる。年間100万人以上の来場者数を誇る「彩湖・道満グリーンパーク」や、首都圏有数の花火大会として人気が高く毎回40万人以上の観覧者がいる「戸田橋花火大会」よりも、戸田ボートコースの方が上位にくる。このことから、市民にとっての認識の高さがうかがえる。

続いて、ボートとの関わり・関心について確認する。

戸田市スポーツ推進計画（2015年3月策定）によると、図表10のとおり市民のボートやカヌー経験者は約1割で、ボートに関心のある人は3割程度となっている。アンケートのコメントの中には、「戸田ボートコースは地域資源として1位に挙げられているが、市民向けに使われることはあまりない。」という声もあり、認識は高い反面、ボートの利用や関わりは少なく、関心は薄いことが読み取れる。

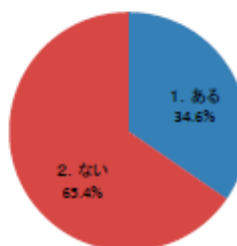
図表10：市民の「ボートとの関わり・関心」の調査結果

問18. 戸田市は、水辺のスポーツ事業を推進しています。あなたは、彩湖または戸田ボートコースでボートやカヌーに乗ったことはありますか。		
回答内容	回答数	割合
1. どちらも経験あり	6	0.6%
2. ボートの経験あり	79	8.0%
3. カヌーの経験あり	10	1.0%
4. どちらも経験なし	895	90.4%
合計	990	100.0%



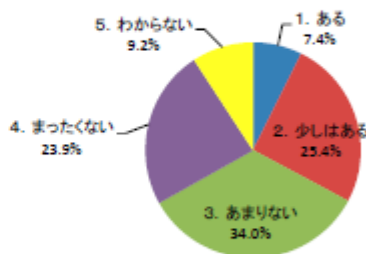
「どちらも経験なし」：90.4%  
 →極端に少ない。ボート、カヌーをもっと市民に広める必要がある。  
 EX) 市内小中学校の活動に組み込む

問19. あなたは、戸田ボートコースで行われているボートの競技大会を観戦したことはありますか。		
回答内容	回答数	割合
1. ある	346	34.6%
2. ない	654	65.4%
合計	1000	100.0%



「ある」：34.6%  
 →割合は低いですが、経験に比べるとまだよい数字といえる。  
 現段階では、市民にとってボート競技とは「実際に行うスポーツ」ではなく、「観戦するスポーツ」であるのではないかと。

問20. あなたは、ボート競技に興味や関心がありますか。		
回答内容	回答数	割合
1. ある	74	7.4%
2. 少しはある	254	25.4%
3. あまりない	340	34.0%
4. まったくない	239	23.9%
5. わからない	92	9.2%
合計	999	100.0%



(問18)で聞いた経験の有無は低い割合でも仕方がない部分はあるが、ここで「関心がない(あまりない、まったくない)」が55.9%という高い数字であることが課題であるといえる。

出典：戸田市民のスポーツに関する意識調査（2013年）

次に、戸田公園（戸田ボートコースを含む。）の利用状況について確認する。

戸田公園周辺住民と周辺のボート関係者に実施した 2016 年 9 月のアンケート調査結果によると、戸田公園の利用頻度として約半数が「ほとんど利用しない」もしくは「利用したことがない」という回答であり、周辺住民にとってもあまり身近なものになっていないことがわかる。これは、公園自体の魅力はもちろんであるが、ボートを体験する機会が少なかったり、戸田ボートコースがあることによって南北に分断されてしまったり、直接関わりを持つ機会が少なかったりするなどといった問題があり、その結果利用が少ないのではないかと推察される。

図表 11：（戸田公園近隣住民・ボート関係者の）戸田公園利用状況

<p><b>テーマ 1 戸田公園について（8問）</b></p> <p>＜利用状況・魅力を感じるか・聖火台の存在・将来求めるもの＞</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>利用頻度</b>：約 50%が「ほとんど利用しない」か、「利用したことがない」</li><li>・ <b>利用状況</b>：近隣住民は、「散歩をするため」が約 45%。ボート関係者は「ボートを見るため」が 35%、次に「散歩をするため」が約 30%。</li><li>・ <b>利用者</b>：近隣住民は、家族と利用している者が多い。 ボート関係者は、一人もしくは友人とが多い。</li><li>・ <b>戸田公園の魅力</b>：利用者の過半数が戸田公園に魅力を感じている。</li><li>・ <b>望まれる整備</b>：駐車場の整備は急務である。また、ボートコースという資源の魅力を高めるため、店舗等の整備、雰囲気改善、バーベキューなどが出来る広場など。</li></ul>
--

出典：「戸田ボートコースの水辺環境を活かしたまちづくりに関する研究」  
に関するアンケート調査結果（2016年）

この他、2015・2016年度の2年間、戸田市政策研究所と目白大学との共同研究において「戸田市における20代・30代の若年層の居場所」に関する調査研究を実施した。その中では試験的な取組として「市民の知っているようで知らない世界」と題して、大学のボート部学生と市民が参加するワークショップを開催している。ここでは、2大学5名のボート部学生から、第1部として戸田ボートコースやボートの魅力・面白さ、日ごろの活動内容・ライフスタイルなどを映像とともに紹介した。また、第2部では、ファシリテーターの進行のもと参加者同士が意見交換を行った。

この中の気になるやり取りとしては、参加者から「ボート競技者からいつも元気をもたらしている。」との発言があったのに対し、ボート部の学生から発せられた「周辺の方に迷惑がられていると思っていた。」との返答が非常に印象的である。ボート部の学生としては、大会での掛け声や早朝の練習などで一部の方からクレームがあることを認識しており、その結果、マイナスの思考となっていたことが判明した。また、参加者からは内心でボート部の学生やボート競技者を応援しているが、普段関わる機会がないため、

今回のような機会が一部で求められていることがわかった。今後、市民とボート部学生やボート競技者が関わる機会をつくることによって、「ボートのまち」としての一体感が醸成され、愛着心の向上にもつながる可能性があることが見出された。対話の一部として、図表 12 のとおり紹介する。

図表 12 : 「ボート部学生たちと地域とのつながり」等に関する対話例

<p>対話例1 ○ボートの大会と地域イベントの連動可能性について</p>	<p>(参)ボートの大きな大会をいつ開催しているかを市民は意外とわかっていない。駅前の商店会の人から、「ボートの大会と地域のイベントを連携したらどうか」とよく言われる。 (ボ)大会時は、部員の家族や友人等、相当の人が戸田を訪れるので、そういうタイミングで地域のイベントを開くのはいいと思う。地域の人たちにも大会を見てもらいたい。</p>
<p>対話例2 ○地域イベントへの参加について</p>	<p>(ボ)戸田でやっているふるさと祭りに参加することがある。「朝市」もあると聞いたが、自分たちには情報が届いていないので、教えて欲しい。 (参)「朝市」は3ヶ月に一度、第2週の日曜日の朝に、市役所南通りの市役所の敷地内で、朝8時から12時までやっている。約1万人が集まるイベントで、今度は12月11日に開催する。 (ボ)日曜日の朝なら練習が終わってから行けるので、参加可能。</p>
<p>対話例3 ○戸田公園でのボートと地域の連携を巡って</p>	<p>(参)戸田公園でイベントをするとき等に、あの場でボート部のイベントとコラボレーションできたら理想的だと感じている。 (ボ)学生を呼び込むとたくさん来るのでいいと思う。ぜひ、その際にはお声をかけて欲しい。</p>
<p>対話例4 ○ボートコースでお弁当販売できたら・・・</p>	<p>(ボ)大会時でも、現在は、お祭りの屋台は少しだけ。例えば、ケバブとか。私たちは、お腹が空いたら、食べることもある。食べている人を見かけることもある。あの場所は出店すればよく売れると思うが、ただ、許可がどうなっているかについて、私たちはわからない。 (ス)あそこは県が管理しているという事情があって、屋台を出すのも申請先は県になる。そのため、市が直接口は出せないが、皆さんから要望次第では実現の可能性はある。 (ボ)私たちもいろんなお店があれば、レースの後、楽しみに行きたいと思っているので、よろしく願いたい。</p>
<p>対話例5 ○ボート部の練習時の声をめぐって</p>	<p>(ボ)ボート場の近くにお住まいの住民の方々にとって、ボート部の練習時や大会時の掛け声等は迷惑ではないか？ (参)太鼓や応援で「今日、試合があるのかな」と気づく。学生が今日も頑張っていると思って、むしろ元気をもらい応援したくなる。もともと戸田に住んでいれば、ボート部がいる風景は当たり前なので、「うるさい」と感じる人がいたとしたら新しく戸田に来た人かもしれない。ただ、川岸以外に住んでいる人は、こういった風景は想像できないかもしれない。</p>

※(参):参加者, (ボ):ボート部大学生, (ス):スタッフの略

出典：戸田市における20代・30代の若年層の居場所に関する応用研究（2017年）

## （2）町会・自治会インタビュー及びアンケート調査結果

前項（1）までの調査結果から、ボート部学生やボート競技者と市民との間で、戸田ボートコースに対する認識が大きく異なることがわかった。競技者と市民に共通する認識としては、戸田ボートコースを戸田市の代表的な地域資源と捉えている点である。しかし、多くの市民は戸田ボートコースや競技者との関わり自体少なく、関心も比較的低いというマイナス面もあることがわかった。

このような中、市民一人一人の個人との関わりではなく、地域の組織である町会・自治会と戸田ボートコース利用者に接点があることが調査を進めていくなかで判明した。そこで、戸田ボートコースを利用している大学ボート部と交流がある2町会を対象としてインタビュー調査を実施し、関わり方について調べることにした。

インタビュー調査については、戸田ボートコースに隣接しており、最も交流が盛んな「旭が丘町会」と、一般的な関わり方の町会・自治会を想定して戸田ボートコースから少し離れた「大前町会」にそれぞれ依頼し、実施した（写真4）。

写真4：旭が丘町会会館及び大前町会会館



## ① 町会・自治会インタビュー調査結果

<調査対象及び調査方法>

- ・調査対象 旭が丘町会及び大前町会
- ・調査日程 2017年12月5日、各2時間
- ・調査方法 町会長、副町会長及び会館管理者へのインタビュー形式
- ・調査項目 主に「きっかけ」「関わり方」「今後の意向」など
- ・調査目的 アンケート調査を実施する前に、町会・自治会と戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）との関わり方の実態を確認し、仮説を立案する。

## ○ 大学ボート部と関わるきっかけについて

<旭が丘町会>

- ・当初のきっかけとしては、災害等の際にボート学生の力を借りることができないかと当時の町会関係者が考え、その考えに賛同したのが法政大学であった。法政大学とは覚書を締結し、有事の際に大学艇庫の2階を避難所として利用することができる。
- ・日本体育大学との連携では、戸田ボートコース周辺に艇庫を構えていない大学であることから、昔から会館の利用が行われていた。その後、町会長や町会関係者とボート部の監督が親密となり、現在は町会の賛助会員になって会館利用が行われている。
- ・1997年から法政大学、2004年から明治大学、2016年から日本体育大学の現在3大学と連携している。

<大前町会>

- ・20年程前、全日本大学選手権大会の開催時に参加チームの宿泊先として関係者から

声掛けがあったのが始まりのようである。

・過去何年も継続して同志社大学のボート部と関わりがある。ただ、大学ボート部との関わり始めた当初は、別の大学と関係があった。

## ○ 大学ボート部との関わり方について

<旭が丘町会>

・会館の貸出しとしては、日本体育大学や龍谷大学（年4回程度）が利用することが多く、その他にも直接連絡が入って許可することがある。

・町会の賛助会員となっている法政大学、明治大学及び日本体育大学のボート部との関わりとしては、町会の夏祭りにも学生が参加し、盆踊りや出店を楽しむだけでなくカラオケ大会に加わるなど、町会会員からの評判も良い。

・市の声掛けをきっかけとして、3大学のボート部学生と町会の交流イベントを開催し、エルゴ競漕やかると大会、防災の紹介などの連携事業も開催している。

<大前町会>

・会館の貸出しが中心となっており、大会時には他の会館利用の予定が入っていても、同志社大学が利用できるよう調整している。

・大会時に利用しているため、準決勝に勝ち残ったら応援に行ったり、食材や飲み物の差し入れなどを行ったりすることで、後方支援をしている。

・課題としては、会館を貸し出しているときはボート部の学生が会館全体を利用しているため、なかなか町会会員が会館に入ることができず、関係を深めるきっかけが難しいということである。

## ○ （会館利用時の）学生の生活スタイルについて

<旭が丘町会>

・ふとんなどは自ら手配し、食事も周辺スーパーなどに買い出しに行き自炊している。

・利用時は大会に集中しているため、町会会員との交流はほとんどない。

<大前町会>

・ふとんの手配や食事に関しては、旭が丘町会と同様である。

・洗濯に関しては、同志社大学の洗濯機を町会で預かっており、大会時はその洗濯機を出して使用している。

・毎回ではないが、銭湯への送り迎えなどを町会関係者で行ったりもする。

・こちらも旭が丘町会と同様であるが、利用時は大会に集中しており、交流する機会がほとんどない。



## ○（会館利用時の）トラブルについて

### <旭が丘町会>

- ・以前、会館の壁に穴を開けてしまったことがあったが、すぐに報告があり対処することができた。
- ・それ以外は、利用時のごみ処理も大学で自主的に行っており、問題はない。

### <大前町会>

- ・以前、大会の結果などの理由で学生同士の喧嘩があったことを記憶しているが、基本的に利用時の問題はない。
- ・ごみ処理については、大会最終日が日曜日であるため会館の管理者が行っており、この点を改善したいという意見があった。

## ○ 今後の関わり方について

### <旭が丘町会>

- ・今後も既存の連携している大学とは継続的に関わっていきたい。
- ・町会会員の人数も限られているため、これ以上の大学との連携は難しい。

### <大前町会>

- ・旭が丘町会と同様、今後も既存の連携大学とは継続的に関わっていきたい。
- ・現在、ボート大会期間中の限られた日程になっているため、1日でも利用日数が延長できると地域の案内や交流会など、関わり方が深まると感じている。

## ○ インタビュー調査からの仮説

今回の調査から以下の3つの仮説を立案し、アンケート調査に活かすこととした。

- (1) 町会・自治会と戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）との関係としては、会館の貸出しを中心に、関わりがあるのではないか。
- (2) 町会・自治会は、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）の活動に対して好意的に受け止めているのではないか。
- (3) 既存の取組以外にも、新たな関わり方を求めているのではないか。

## ② アンケート調査

続いて、上記のインタビュー調査結果を踏まえ、市内46町会・自治会に対して戸田ボートコース利用者と町会・自治会との関わりに関するアンケート調査を実施した。これは、市民との関係性について整理することで今後の事業展開に活かすことを目的として進めたものである。調査内容については、以下のとおりとなっている。

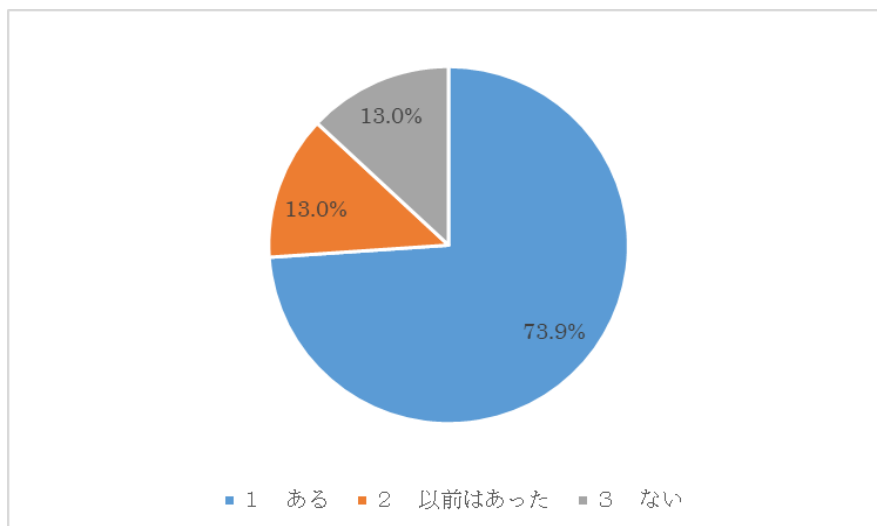
<調査対象及び調査方法>

- ・調査対象 市内 46 町会・自治会
- ・調査期間 2017 年 12 月 19 日～2018 年 2 月 27 日
- ・調査方法 郵送及び電子メールにて配付、F A X、窓口受け取り及び電子メールにて回収
- ・調査項目 「関わりの有無」「頻度」「内容」「きっかけ」「今後の意向」の計 5 項目
- ・回収状況 有効回答数 46 (回収率：100.0%)

○ 関わり

問 1 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わる機会がありますか？

図表 13：戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わる機会（n=46）

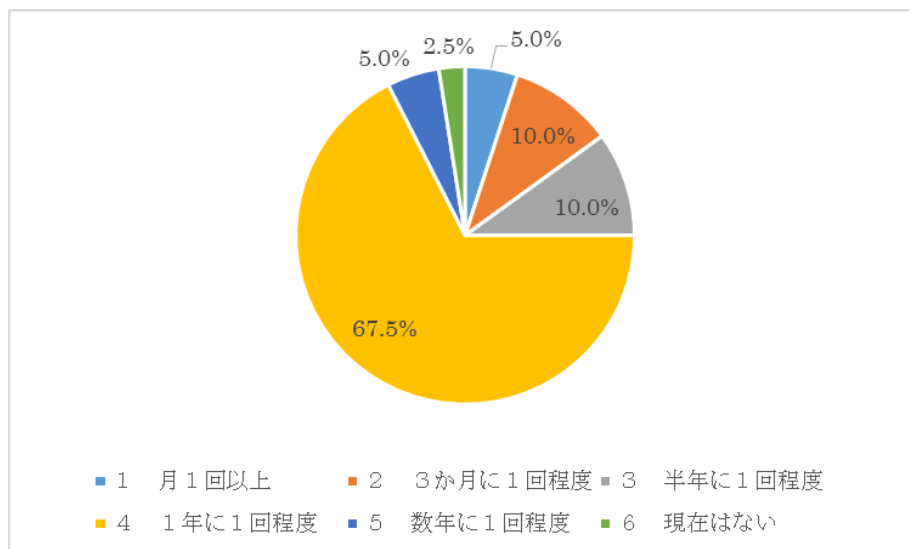


図表 13 によると、現時点で関わる機会が「ある」との回答は、全体の 73.9%あり、「以前はあった」という項目を含めると、全体の約 9 割で何かしらの関わりがあることがわかった。このことから、市民個人としては関わりが少ないと感じている状況であるが、地域全体では関わる機会があることがわかった。

○ 頻度

問 2 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）とどのくらいの頻度で関わりがありますか？

図表 14：戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わる頻度（n=46）

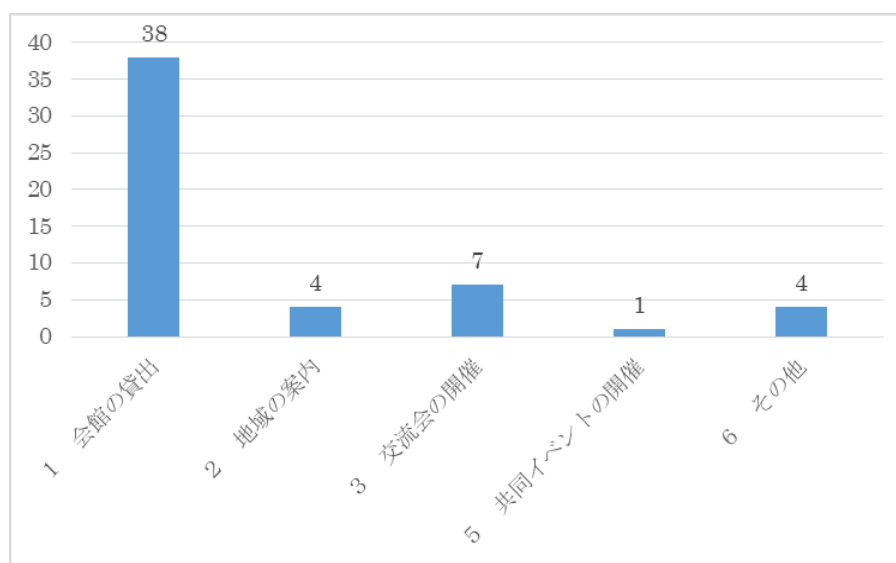


図表 14 によると、関わる頻度としては「1年に1回程度」が67.5%と最も多く、全日本大学選手権大会を中心として多くの町会・自治会が関わっていることがわかった。また、「月に1回以上」という回答も2件（5.0%）あることから、町会・自治会によって関係の深さや認識に差があることもわかった。

### ○ 内容

問3 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）とどのような関わりがあります（ありました）か？（複数回答）

図表 15：戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わり方（内容）

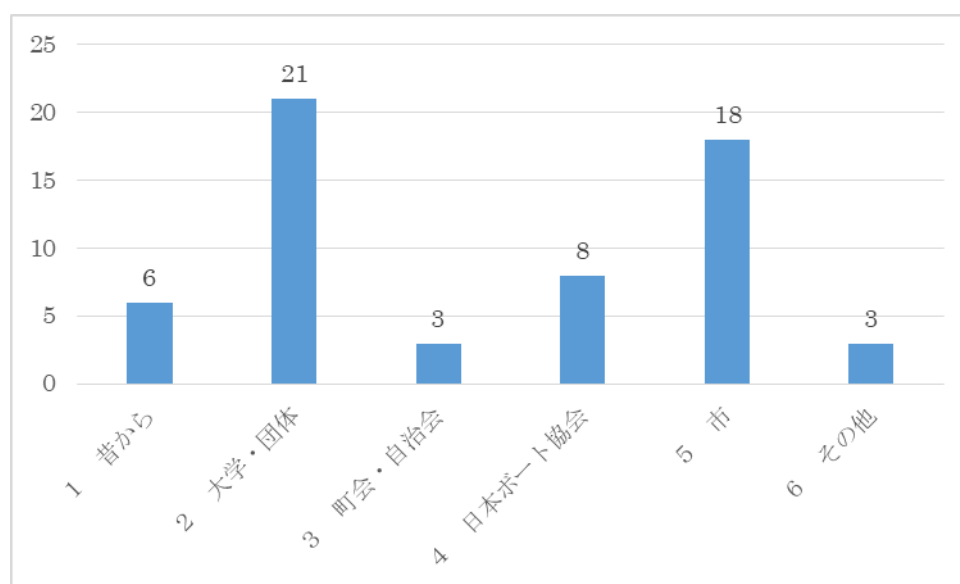


図表 15 によると、関わり方としては「会館の貸出し」が 95.0%と最も多く、関わりのある町会・自治会の全てが宿泊先として会館を貸し出していることがわかった。また、それ以外の関わり方としては、「交流会の開催」や「地域の案内」が続いており、町会・自治会によっては戸田ボートコースを利用する大学ボート部学生と関係が深いところもあることがわかった。その他の回答としては、自転車の貸出しを行って戸田ボートコースまでの行き来や周辺の買い物をサポートしたり、実際にボート競技に参加して交流を深めたりしている町会・自治会もあることがわかった。

### ○ きっかけ

問 4 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）とどのようなきっかけで関わりを持ちましたか？（複数回答）

図表 16：戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わるきっかけ

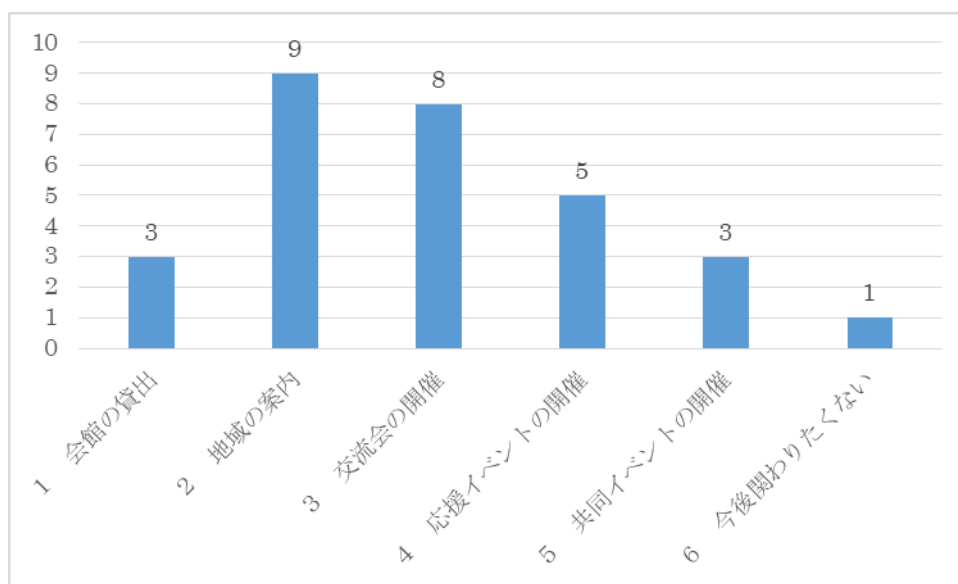


図表 16 によると、関わるきっかけは様々であり、大学や団体側からの問合せから関係を構築しているところが最も多く、その後市からの紹介が続くことがわかった。ただ、全体としては、過去に関係があった大学と毎年関わりを持っているような状況であり、会館貸出しなどは毎年同じ会館を継続して利用していることがわかった。結果としては、町会・自治会と同じ大学との関係が続いているような状況である。

### ○ 今後の意向

問 6 今後、戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）とどのような関わり方を考えていますか？（複数回答）

図表 17：戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）との新たな関わり方（意向）



図表 17 によると、図表 15（問 3）以外の新たな関わり方としてどのような意向があるかということに対しては、地域の案内や交流会の開催、応援イベントの開催などの回答があった。このことから、現在よりも関係を発展させたい意向を持っている町会・自治会が多くあることがわかった。ただ、この点も町会・自治会によって温度差があり、今後も現状のまま続けていくといった声も多く、考え方は一律ではないこともわかった。

### ③ インタビュー及びアンケート調査結果のポイント

インタビュー及びアンケート調査結果から、市民個人としての交流は少ない反面、多くの町会・自治会が戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と関わっていることがわかった。調査結果のポイントとしては、以下の 6 点が挙げられる。

- （1）会館の貸出しを主な理由として、既に多くの町会・自治会が戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）と接点がある。
- （2）市内に点在している町会・自治会の会館が利用されているため、戸田ボートコース周辺地域だけでなく、市内全域に関わりのある地域が広がっている。
- （3）各町会・自治会によって考え方は異なるが、新たな関わり方を求めている町会・自治会がある。
- （4）選手は、ボート大会の期間中大会に集中しており、最終日を除いて交流する機会は難しい。しかし、宿泊を 1 日でも延長することができれば交流する内容は広がる可能性がある。

- (5) ボート部の学生を支える態勢としての基盤はすでに構築されている。一方で、それぞれが個別に対応している状況である。
- (6) 旭が丘町会以外の町会・自治会に関しては、戸田ボートコース周辺の大学ではなく、地方の大学と接点がある。今後、戸田ボートコース周辺に艇庫や宿泊施設を持つ大学との関係づくりが必要であり、学生の実態などを市民に周知することも必要である。

### 3.2 市と戸田ボートコースとの関わり

#### (1) 戸田ボートコースを利用した取組

前章で言及してきたとおり、戸田ボートコースは、ボート競技者が中心に利用されている。しかし、戸田ボートコースは他に誇る戸田市独自の地域資源であり、また、ボート競技者や関係者は貴重な人材である。そのため、市民がボート競技を体験したり、ボート競技者を応援したり、ボート関係者と市民との交流を図っていくことが必要である。このようななか、現在各部署において主に図表 18 のような取組を行っている。

図表 18：戸田ボートコースでの主な取組

No.	取組内容	関係部署
1	ボート教室（体験教室・親子教室）	文化スポーツ課
2	ボート競技観戦ガイドツアー	文化スポーツ課
3	ナックル艇の貸出し、市立艇庫の設置	文化スポーツ課
4	ボート学生と地域住民との交流企画	文化スポーツ課
5	イケチョウ貝を活用した水質浄化	環境課
6	ボート部学生等を対象とした防災訓練	消防本部

写真 5：親子ボート教室の様子



出典：広報戸田市 2015 年 7 月 1 日号

写真6：ボート学生と地域住民との交流企画の様子



出典：広報戸田市 2016年9月1日号

このほかにも、昨年度開催した全国市町村交流レガッタ戸田大会や下水道マンホールカードの配布、市内バスツアーでの案内などを行っているが、市全体からすると参加者は一部に限られ、市として関与している取組も少ないのが現状である。また、それぞれの部署が独自に取り組んでいるような状況である。今後、市民の戸田ボートコースやボート関係者との関わりを増やすためには、一部の部署だけで取り組むのではなく、市全体として取り組んでいく体制の構築が求められるのではないだろうか。

## （2）職員アンケート調査結果

前節（3.2）においては、各種調査や町会・自治会アンケート調査の結果から、市民と戸田ボートコース利用者（ボート関係団体）について関わりや認識について調査した。また、前項（1）では、行政が主体となっている戸田ボートコースでの取組をまとめた。

続いては、「ボートのまち」が浸透するためには欠かせない、職員の意識について調査する。調査内容については参考資料のとおりであるが、本稿では主に「利用状況」「頻度」「目的」「愛着度」を整理し、今後の提言へとつなげていく。

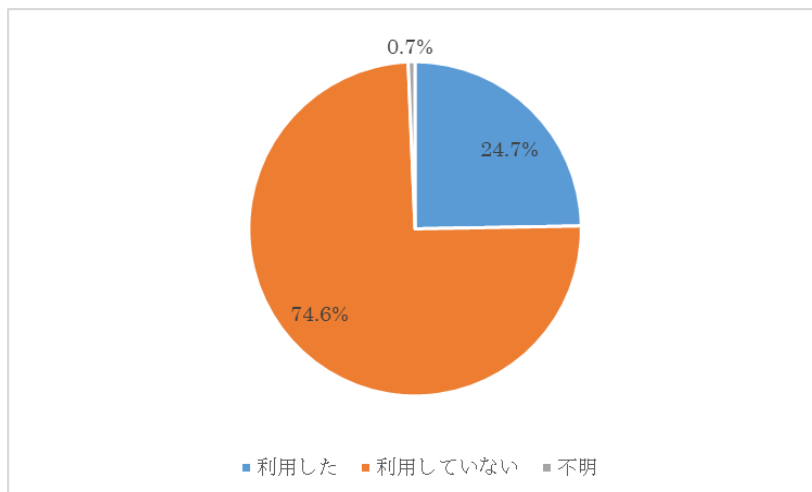
### <調査対象及び調査方法>

- |       |  |
|-------|--|
| ・調査対象 | 全職員、857名（2018年2月13日時点）※休業中等の職員は除く                      |
| ・調査期間 | 2018年2月13日～2018年2月23日                                  |
| ・調査方法 | 庁内ネットワークシステムのアンケート機能を活用して依頼、同ネットワーク上にて回答受付             |
| ・調査内容 | （1）戸田公園（戸田ボートコース）について<br>（2）彩湖・道満グリーンパークについて<br>（3）その他 |
| ・回収状況 | 有効回答数 449（有効回答率：52.4%）                                 |

## ○ 利用状況

問6 過去1年間のあなたの戸田公園（戸田ボートコース）の利用状況について

図表 18：過去1年間の戸田公園（戸田ボートコース）の利用状況（n=449）

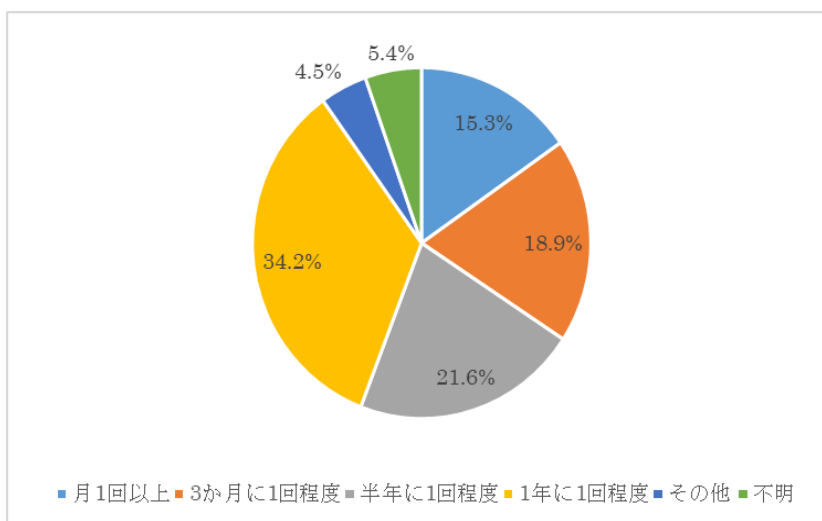


図表 18 によると、過去1年間の職員の戸田公園（戸田ボートコース）の利用状況としては、「利用した」との回答はわずか111件（24.7%）しかないことがわかった。そのため、4人中3人は1年間戸田公園（戸田ボートコース）を全く利用していない状況である。回答者の4割は市民であることを考えても、非常に少ないことがわかった。

## ○ 利用頻度

問7 （問6で「利用した」と回答した場合のみ）利用頻度について

図表 19：戸田公園（戸田ボートコース）の利用頻度（n=111）



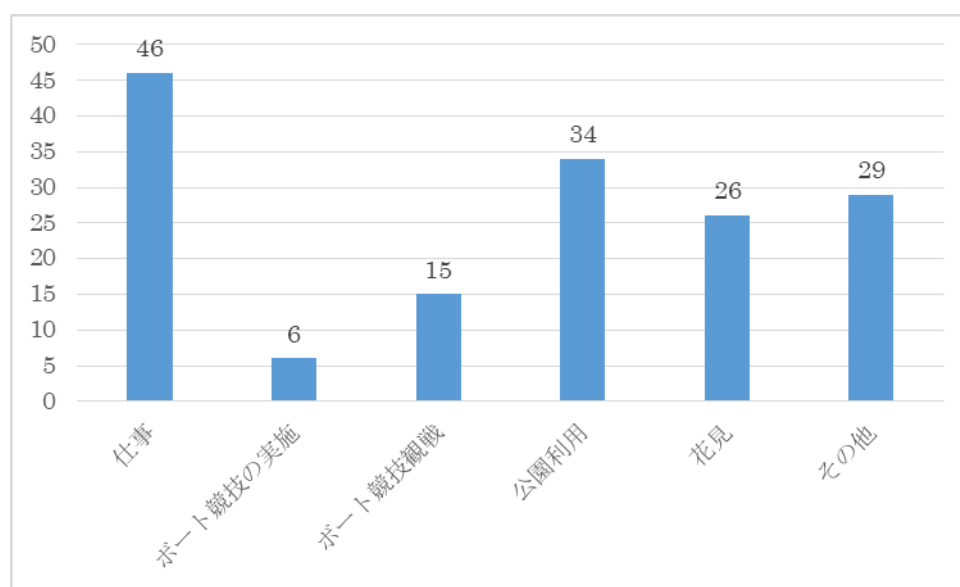


図表 19 によると、利用頻度としては「1年に1回程度」が34.2%と最も多く、その次に「半年に1回程度」が21.6%となっている。そのため、利用したと回答した職員でも全体の5割以上は年間2回以内となっていることがわかった。また、「月1回以上」との回答も17件(15.3%)あることから、職員の利用状況もかなりバラつきがあることがわかった。

## ○ 利用目的

問8 (問6で「利用した」と回答した場合のみ) 利用した目的について (複数回答)

図表 20 : 戸田公園 (戸田ボートコース) の利用目的

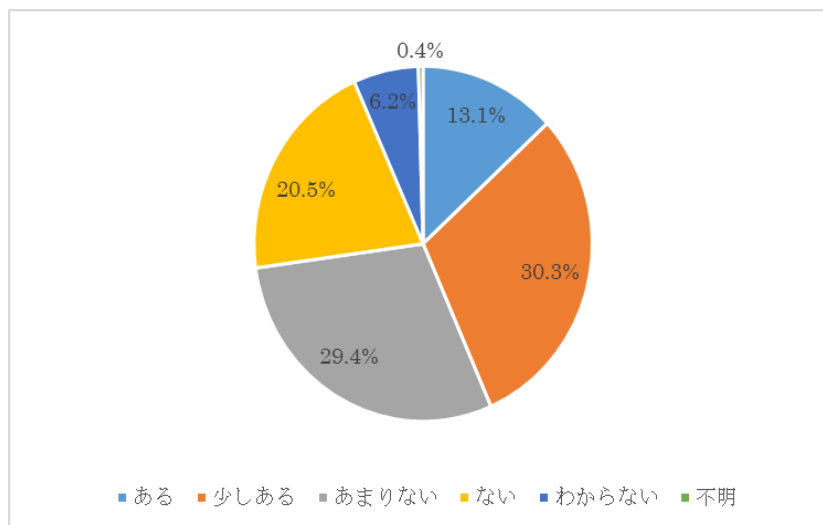


図表 20 によると、利用した目的としては「仕事」が46件と最も多く、過去1年間で戸田公園 (戸田ボートコース) の利用者の4割に当たることがわかった。また、「ボート競技の実施」はわずか6件(5.4%)であり、戸田ボートコースでボート競技を実施している職員は数名しかいないことがわかった。また、短い期間ではあるが、桜堤での「花見」は26件と多くの回答があり、散歩やランニングなども含めたボート以外で利用されていることもわかった。

## ○ 愛着

問11 あなたの戸田ボートコースやボート競技への愛着について

図表 21：戸田ボートコースやボート競技への愛着（n=449）



図表 21 によると、戸田ボートコースやボート競技への愛着は、「少しある」との回答が 30.3%（136 件）と最も多いが、2 番目に多い「あまりない」が 29.4%（132 件）との差がほとんどないことがわかった。また、「ある」と「少しある」を加えた愛着を持っている職員は全体の 43.4%しかなく、「ない」と「あまりない」との回答よりも少ない結果となってしまった。約 5 割の職員は、どちらかと言えば愛着がないという結果であり、市民に対して「ボートのまち」を訴えることは必要であるが、内部の職員に対しても行う必要性が判明した。

また、今回の職員アンケート調査では、彩湖・道満グリーンパークについても上記と同じ質問をしている。これは、地域資源として職員の認識や関わり、愛着などに違いがあるのかを把握するために実施したものである。そのため、本稿では「利用状況」「利用頻度」「利用目的」「愛着」の 4 つの項目について、結果のみ紹介することとする。

彩湖・道満グリーンパークの過去 1 年間の職員の利用状況としては、「利用した」との回答は 226 件（59.2%）となっている。また、利用頻度としては「半年に 1 回程度」が 73 件（27.4%）と最も多く、「3 か月に 1 回程度」が 72 件（27.1%）と続いている。次に、利用した目的としては「スポーツの実施」と「公園利用」が共に 113 件と最も多く、仕事以外の利用方法が多くなっている。最後に、彩湖・道満グリーンパークへの愛着は「少しある」との回答が 175 件（39.0%）と最も多く、「ある」との回答が 144 件（32.1%）と続いている。そのため、「ある」と「少しある」を加えた愛着を持っている職員は全体の 71.1%という結果であり、彩湖・道満グリーンパークに関しては愛着のある職員は 7 割以上いることがわかった。

### 3.3 小括

- (1) 先人たちの並々ならぬ努力により「戸田ボートコース」が誕生した。
- (2) 1964年東京オリンピック以降、戸田ボートコースの利用者や大会利用が増加し、日本随一のボート場となった。一方で、戸田ボートコースの利用者の増加により、コースは飽和状態になっている。
- (3) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のボート競技会場が「海の森水上競技場」に決定し、今後戸田ボートコースへの影響が懸念される。
- (4) 市民にとっては、戸田ボートコースが市独自の地域資源として認識されている。一方で、市民との関わりが少ない状況にあることから「有形のレガシー」と言えるが、一体感や愛着があふれるような「無形のレガシー」とはなり得ていない。
- (5) ボート競技や戸田ボートコースを活用した取組は実施されているが、一部の部署に限られている状況にある。
- (6) 「ボートのまち」を推進していくはずの職員が、戸田ボートコースやボート競技に対して愛着があまりない状況である。

## 第4章 スポーツを通じたまちづくり事例

### 4.1 「ボートのまち天竜」

#### —スポーツ拠点づくり推進事業を活用した「ボートのまち」

ここまで第2章では、戸田ボートコースの歴史や現状を把握し、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた動きをまとめることで、今後懸念される事項について検討した。また、第3章では戸田ボートコースと市民や市との関係性を調査し、現状の関わり方などから課題を見出すことによって、今後無形のレガシーとしても市民やボート関係者に愛され続け、自慢の場所として継承していくような提言に向けて準備を進めてきたところである。

本章では、スポーツを通じたまちづくり事例として「ボートのまち天竜」と、「サッカーのまち藤枝」の2つの事例を紹介する。今回の事例調査に関しては、ボートのまちづくりに限定するのではなく、広くスポーツを活用したまちづくりの観点から先行事例を調査することにより、戸田市としての方向性に反映させることを目指したものである。なお、今回の事例調査に当たっては、2017年12月25日から26日までの2日間実際に視察し、既存の公開資料では確認できない担当者からの生の声や、現場を体感することによってより具体的な内容を確認することとした。

まず、ボートのまちづくりを推進している静岡県浜松市天竜区の「ボートのまち天竜」の取組について言及する。

#### ① 背景

1977年に、天竜川の最下流域に船明ダムが完成し、その湖面利用について旧天竜市（2005年合併）が市民と議論を重ねた結果、「ボートの聖地天竜」を掲げて取組を開始したのが始まりである。1989年には、旧天竜市のシンボルとして天竜漕艇場が完成し、翌年には第1回全国高等学校選抜ボート大会を開催するなど、ボートを活用したまちづくりが進んでいった。また、1997年から2000年まで継続して「全国に誇るボートのまちづくり整備事業」を展開し、現在の天竜ボート場にリニューアルされて、今日に至っている（写真7）。

さらに、旧天竜市では、2004年に総務省・文部科学省の「スポーツ拠点づくり推進事業」の認定を受け、全国高等学校選抜ボート大会を継続的に開催するようになった。スポーツ拠点づくり推進事業については、一般財団法人地域活性化センターが主体となり、学生たちが目指すメッカづくりを進め、地域活性化と地域間交流を目指すことを目的として実施されるものである。この事業を推進した結果、高校ボート部員からは「天竜＝選抜（憧れの地）」として定着することとなった。

写真7：天竜ボート場・月艇庫



## ② ボートを活用したまちづくり事例

浜松市天竜区では、市民・団体・庁内の連携により取組を進めており、この連携を中心にまとめることとする。

まず、市民との連携としては、市民大会「ボートフェスティバル in 天竜」の開催を実行委員会形式にて実施している。この大会は、市町村交流レガッタの予選という位置づけであり、地元クラブ（競技運営）や高校生（運営協力）、行政（事務局）、地元企業等（参加者）がそれぞれの役割を担い、開催している。最近では、競技者の高齢化等の理由により、日頃から練習しているチームは減少して数チームとなってしまったようである。しかし、大会本番では企業単位で声掛けをするにより、多くの参加チームが出場して地元企業の交流の場にもなっている。

また、全国高等選抜ボート大会の協力としては、こちらも人数は減ってきたという話ではあったが、地元ボランティアとして豚汁サービスの提供や、地元特産品等の販売テントの出店などで支援を行っている。

続いて、団体との連携としては、大きく3つの連携を行っている。まず、ボート教室についてであるが、こちらは市の事業として地元クラブへの委託により、主に市内の小・中学生を対象として開催している。また、天竜ボート場には、宿泊施設「天竜湖畔の家」や「天竜林業体育館」が隣接しており、この施設も活用して企業の研修なども行われている。ボート競技を通じて、同じ艇の競技者同士の呼吸を合わせ、連帯感を学ぶことを目的として実施している（写真8）。このボートを活用した研修については、当時の旧天竜市では新入職員研修にも組み込まれていたとのことである。

全国選抜ボート大会については、競技団体による競技運営や地元高校生等のボランティアの運営補助、地元紙・地元企業の協力など、多くの団体を巻き込むことによって開催している状況である。さらに、年2回のボート場関係団体等連絡協議会を大会前に開催することによって、連携を進めている状況である。

写真8：天竜湖畔の家・天竜林業体育館



市内の連携については、大きく2つの取組を行っている。まず、天竜ボート場を中心として、設置目的が異なる周辺施設との一体的な管理と利用促進を行っている。こちらは、天竜ボート場（スポーツ施設）、天竜湖畔の家（青少年教育施設）、天竜林業体育館（産業振興施設）、天竜相津マリーナ（観光施設）の4つの施設を一体的に管理することによって、効率的な運営を進めるとともに、連携強化に取り組んでいる（写真9）。

写真9：天竜相津マリーナ



二つ目としては、ボート大会等への職員の協力がある。ここでは、救護・救助業務として保健師や消防に依頼するとともに、その他の職員は大会記念Tシャツの購入や、市民ボート大会に職員が積極的に参加するなど、自ら関わっている。これは前述したとおり、旧天竜市のときに職員研修の一環としてボートを経験している職員がいるため、現在の合併後の浜松市職員にも声掛けを行うことで、実現しているとのことである。実際にボートを体験することによって身近に感じ、また、職員が経験することによってボートのまちが市民へと浸透している。

### ③ 特徴

浜松市天竜区では、ボートのまちづくりに関しては天竜区まちづくり推進課が担当しており、実際には2名の職員が業務を行っている。そのため、人数的にやれることは限られるが、職員の創意工夫により進めている。

最後に、浜松市天竜区の実践で特徴的であり、尚且つ戸田市への反映に向けても検討できる内容を2つ挙げることにする。まず、先述した内容と重複するが、職員研修の一環として職員がボートを経験することである。スポーツを活用したまちづくりを進めるに当たり、職員がそのスポーツを経験しているかどうかは非常に重要である。実際に、ボート大会へ多くの職員が出場しているという話もあり、職員のボート体験人数の増加は欠かせない要素となっている。

二つ目は、担当職員による手作りの発信手法が特徴的である。A1サイズの大きさのポスターパネルを視察時に見かけたが、こちらは職員が職場のプリンターで自ら作成したものである(写真10)。また、浜松市天竜区のホームページでは「ボートのまち天竜」と題して動画を公開しているなど、予算をかけずに情報を発信している点は見習うべき取組である。このように、すぐにでも動き出すことができる取組については参考として取り入れ、戸田市版に置き換えて実践することも一案である。

写真10：ボートのまち啓発ポスターパネル



## 4.2 「サッカーのまち藤枝」

### ードリームプラン2014 ～歴史・誇り・夢あふれる「サッカーのまち」

次に、静岡県藤枝市におけるサッカーを核としたまちづくりについて、スポーツを活用したまちづくりの先行事例について言及する。ボートとサッカーで競技は違うものの、有形・無形のレガシーとして市民や競技者に浸透している点については、参考になることから調査を進めたものである。

## ① 背景

藤枝市は、サッカーの歴史が90年以上にも及び、1924年に当時の志太中学校（現在の藤枝東高等学校）の校技として取り入れられたことが始まりである。そこから現在までの間に数々の全国大会で輝かしい成績を収め、サッカー界に多くの優秀な人材を輩出するなど「サッカーのまち」として先駆的な役割が果たされている。また、市民のサッカーへの関心は非常に高く、競技者のみならず多くの市民がサッカーに親しんでおり、一つのスポーツの枠を越えた文化として根付いている状況である。

また、市内を視察した際、サッカーに関連するものを多く目にする事ができた。具体的には、藤枝小学校の校門側にある「サッカースポーツ発祥の地」や、藤枝総合運動公園の彫刻ボール「サッカーボールモニュメント」などである（写真11）。藤枝小学校は、日本初のサッカースポーツ少年団として1965年に日本体育協会に登録されている。幼い頃からサッカーが身近な存在となっており、サッカーのまち藤枝ならではのものである。藤枝総合運動公園に関しては、総面積43ヘクタールの敷地に、収容人員12,000人のサッカー専用スタジアムがあるなど、サッカーを实际にする環境も整っている。

写真11：サッカースポーツ発祥の地及びサッカーボールモニュメント



## ② サッカーを活用したまちづくり事例

藤枝市では、サッカーを核としたまちづくりを推進するため、「サッカーのまち藤枝ドリームプラン」を策定し、第5次藤枝市総合計画とも関連付けることで、積極的に施策を推進している。総合計画においては、第5分野の市民元気力創造戦略の中で「サッカーを核としたまちづくりを推進します」と明確に記載されており、主な取組としても「サッカーのまち藤枝・なでしこ育成事業」などが実施されている。また、政策の成果指標においても、サッカー場の利用者数やサッカー大会等における交流人口などがあり、スポーツの中でも特にサッカーを推進している。

サッカーのまちづくりに関しては、人が行き来する玄関口に当たる駅の改札を通過したときから始まっている。改札を通過すると、「蹴球都市」と書かれ、サッカーグラウ



ンドに市民や競技者が集まった写真が大きく掲示されている。また、市役所までの道中では、サッカーのまちラッピングバスが走っており、市のイメージカラーである藤色とサッカーがかなり印象的であった（写真 12）。

写真 12：駅構内及びサッカーのまちラッピングバス



このようにサッカーが根付いている藤枝市においては、2009 年度にサッカーのまち藤枝ドリームプランを策定し、より一層のサッカーの振興とともに、経済の活性化や青少年の健全育成、ふるさと意識の醸成、地域間・世代間交流など、サッカーを商業、観光、教育などの多様な観点から取組が開始された。2014 年度からは「サッカーのまちドリームプラン 2014」をスタートさせ、組織的かつ戦略的に施策が進められている。

図表 22：サッカーを核としたまちづくりのイメージ

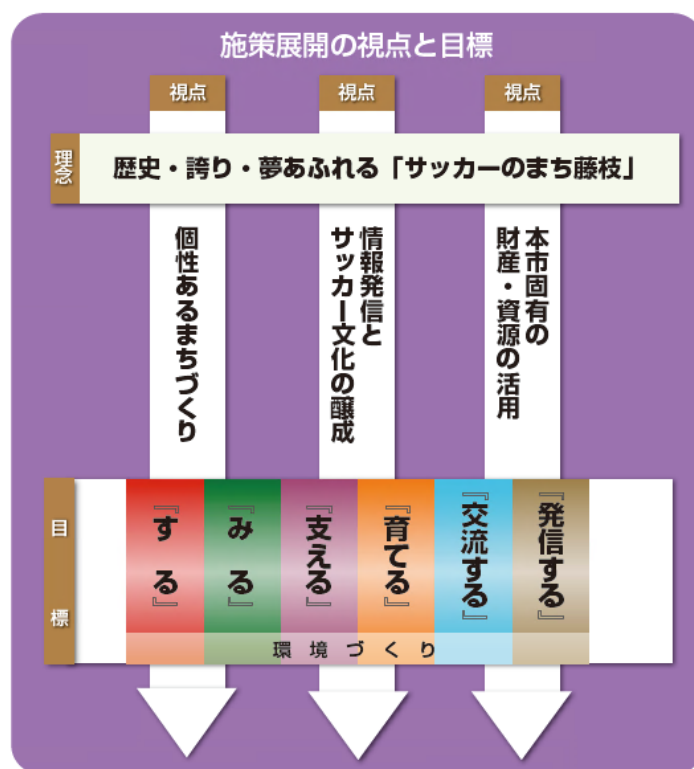


出典：サッカーのまち藤枝ドリームプラン 2014

### ③ 特徴

藤枝市では、「サッカーのまち藤枝ドリームプラン 2014」を策定し、行政計画として基本理念を「歴史・誇り・夢あふれる『サッカーのまち藤枝』」と定め、6つの基本目標として「する」「みる」「支える」「育てる」「交流する」「発信する」の環境づくりを進めていることが特徴である。また、基本目標においては、該当する44事業を設定し、担当部署や予算も把握しながら進行管理を行っている。

図表 23：（サッカーのまち藤枝ドリームプラン 2014）施策展開の視点と6つの目標



出典：サッカーのまち藤枝ドリームプラン 2014

該当する事業については、戸田市においても取り入れることができる内容が含まれている。例えば、「支える」環境づくりでは「藤枝市ゆかりのサッカー選手応援事業」として、市にゆかりのある選手を応援したり、市を訪れる人に対する「おもてなし環境整備事業」を実施したりすることで、大会期間中などに市民が一体となって盛り上げたりしている。また、「育てる」環境づくりでは、トップアスリートを講師として迎えて市内全小学校の5年生を対象とした『夢の教室』の開催事業』の開催や、「スポーツ食育推進事業」を行ったりしている。これらは、ドリームプラン 2014 で実施されている事業の一部であるが、該当する部署単独ではなく、様々な部署が連携することによって効果的な施策の展開へとつながり、更にはサッカー文化の醸成が図られている。

## 第5章 「ボートのまち戸田」として愛され続けるために

### 5.1 「ボートのまち」としての今後の在り方

ここまで「ボートのまち戸田」として愛され続けるために、様々な角度から調査研究を進めてきた。第2章では、戸田ボートコースの歴史を振り返り、先人たちがどのような思いで戸田ボートコースを創り上げ、その後ボート競技者から愛され目指すべき場所へと発展してきたのかが明らかとなった。

一方で、第3章の戸田ボートコースと市民や市との関係性では、ボート競技者との温度差がかなり広がっていることもわかった。ボートというスポーツの特徴から、道具や場所が限定されてしまうため、誰もが気軽に楽しめるスポーツではなく、すぐに環境を改善させることは難しい。しかし、戸田ボートコースでは、日夜大学ボート部を中心に多くの競技者が活動されており、彼ら彼女らの真剣な眼差しや取組に関しては、実際に競技を体験したことがない人にとっても、思わず応援したくなる存在である。さらに、現在でも市民に愛され身近に感じてもらうような事業を実施しており、アンケート調査結果からはこれまで以上の関わり方を希望している町会・自治会もある。

第1章で言及した研究背景の繰り返しになるが、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催以後、戸田ボートコースはオリンピックのボート競技を開催した日本における唯一無二の場所ではなくなってしまう。今回の研究では、戸田ボートコース完成までの道のりから70年以上にわたって歩んできた「ボートのまち戸田」を調査し、戸田ボートコースのボート競技者や市民との関わりを確認してきたが、今後ボート競技者が戸田市から離れてもよいという結論にはどうしても至らない。

「ボートのまち」として戸田ボートコースがこれまで以上に輝く場所で在り続けるための将来的な課題は山積しているが、まずは「ボートのまち」として歩いていくという共通の認識が必要であり、そのためには一丸となって推進していくという姿勢を明確に打ち出していくことが肝要である。戸田ボートコースがすぐに市民にとって「無形のレガシー」になるわけではない。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催は、今後のまちの在り方を考えるよい契機となり得る。今後は、一歩ずつでも発展を目指していく必要があり、市民への周知や、ボートに対する愛着心の向上につながる地道な取組が求められる。その結果、ボートへの愛着心の向上から「ボートのまち」をキーワードとして、市民が住んでいる戸田市を好きになるようにつなげていくことが必要である。

### 5.2 「有形・無形のレガシー」を目指して

第3章までを振り返ると、戸田ボートコースについては完成までの歴史や現状から

「有形のレガシー」と言える。しかし、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の会場選定でも取り上げられたようにコースの幅員に課題があり、今後インフラを整備していくことは現実的にできない。そのため、今後全国大会や世界大会を開催し続けていくことは難しく、今以上に発展させることはできない状況であり、現状を維持し、後世に残していくことが大切である。

一方で、「無形のレガシー」に関しては、ボート部学生と地域との交流が新たに始まったり、交流イベントが開催されたりするなど要望がある。今後「無形のレガシー」に関しては、より発展させることが期待できることから、ボート部学生と市民、職員も協働して一緒にイベントを参画して実施することで、戸田市らしいレガシーを残すことが戸田市の将来に必要なのではないかと委員からの意見がまとまった。

また、前節（5.1）では、今後の共通認識としての「理念」に関して言及した。しかし、その理念を浸透させるためには、これまでのように各部署で取組を推進するだけでは足りず、今回の研究体制のようにボートのまちづくりに向けて共通した認識を持ち続けるような体制が必要である。そこで、戸田市オリンピック・パラリンピック事業推進本部や実行委員会などで連携して研究を続け、具体的な取組につなげていくべきであると提言したい。

## 第6章 おわりに

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のボート競技会場に関しては、紆余曲折があり、最終的に海の森水上競技場へと決定した。決定するまでには、戸田ボートコースを利用しているボート競技者だけでなく、過去に戸田ボートコースで汗を流したOBやOG、また、ボート競技の経験のない市民からも戸田市での開催に対する要望が数多くあったところである。

今回、「ボートのまち」の未来を見据えたまちづくりをテーマとして調査研究を進めてきたが、調査研究を進めていくなかで、これまで全く知らなかった戸田市がそこには存在していた。戸田市内に大学はないが、戸田ボートコース周辺では多くの大学生が午前5時から練習に励み、大学4年間をボートに捧げている学生市民も多くいる。また、それを支えているマネージャーやOB・OGの存在、周辺の住民とのつながり、町会・自治会の協力が合って戸田ボートコースでの大会が成立していることなど、多くの市民に伝えていきたいことがあふれていた（写真13）。

このように、戸田ボートコースは「有形のレガシー」としてだけではなく、一部では「無形のレガシー」としてもすでに浸透している状況にある。今後市民から認識していただくためには、ボートを他人事としてではなく、「自分事」として認識するような環境づくりが必要である。そして、2020年以降も「ボートのまち戸田」で在り続けるためにも、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を境に、市民にも身近に感じてもらえるボートの意識づくりが推進され、戸田市らしいまちづくりが進むことを期待し、本研究の総括としたい。

写真 13：ボート部中学生と戸田ボートコースの様子



出典：戸田市勢要覧 2016

### 【主な参考文献等】

- ・ 戸田市 (1987) 「戸田市史通史編」 下巻
- ・ 戸田市 (1964) 「広報戸田 昭和 39 (1964) 年 11 月 No. 52」
- ・ 公益社団法人日本ボート協会ホームページ (<https://www.jara.or.jp/>)
- ・ 宮越茂夫 (1995) 「戸田コース今むかし」 日本漕艇協会『漕艇 75 年』、72 頁-79 頁
- ・ 公益社団法人日本ボート協会 (2018) 「R o w i n g ・ no. 544」
- ・ 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ (<https://tokyo2020.org/jp/>)
- ・ 東京都オリンピック・パラリンピック準備局ホームページ (<http://www.2020games.metro.tokyo.jp/>)
- ・ 戸田市政策研究所 (2009) 「戸田市におけるシティセールスの必要性と成功する要件について」
- ・ 戸田市 (2013) 「戸田市民のスポーツに関する意識調査」
- ・ 戸田市 (2015) 「戸田市スポーツ推進計画」
- ・ 戸田市 (2016) 「『戸田ボートコースの水辺環境を活かしたまちづくりに関する研究』に関するアンケート調査結果」
- ・ 戸田市政策研究所／目白大学 (2017) 「戸田市における 20 代・30 代の若年層の居場所に関する応用研究」
- ・ 浜松市天竜区 (2017) 『ようこそ浜松市天竜区へ』 ※視察対応資料
- ・ 浜松市天竜区 (ボートのまち天竜) ホームページ (<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/tn-machi/boat/index.html>)
- ・ 藤枝市 (2014) 「サッカーのまち藤枝ドリームプラン 2014」
- ・ 藤枝市 (藤枝サッカー (サッカーのまち藤枝 P R ホームページ)) ホームページ (<http://www.city.fujieda.shizuoka.jp/soccer/index.html>)
- ・ 原田宗彦 (2016) 「スポーツ都市戦略 2020 年後を見すえたまちづくり」 学芸出版社
- ・ 間野義之 (2015) 「奇跡の 3 年 2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える」 徳間書店

# < 参考資料 >

## 1. まちづくり戦略会議の審議経過

第1回	2017年7月28日（金）午前9時55分～午前10時28分 議事 （1）まちづくり戦略会議のテーマについて （2）今後のスケジュールについて 2017年度のまちづくり戦略会議においては、研究テーマ「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とする「ボートのまち」の未来を見据えたまちづくりに関する研究」を実施することとなった。
第2回	2017年11月14日（火）午後2時～午後3時 議事 （1）戸田ボートコースの研究経過について （2）今後の調査内容について その他、町会・自治会アンケート調査に関する議論
第3回	2018年1月29日（月）午前10時～午前11時15分 議事 （1）インタビュー及びアンケート調査結果について （2）スポーツを通じたまちづくり事例の調査結果について （3）提言内容（案）について その他、職員向けアンケート調査に関する議論
第4回	2018年3月7日（水）午前9時55分～午前10時20分 議事 （1）提言書（案）について その他、市長への提言書提出に関する報告
市長 提言	2018年3月15日（木）午後2時～ 会長説明「平成29年度まちづくり戦略会議提言書について」



## 2. まちづくり戦略会議メンバー

	職 名	氏 名	備 考
1	上下水道部次長	石橋 睦雄	会 長
2	消防本部次長	中村 宏	副会長
3	総務部次長	田中 庸介	
4	財務部次長	五條 宏	
5	市民生活部次長	渡邊 昌彦	
6	環境経済部次長	佐藤 健治	
7	福祉部次長	吉野 博司	
8	こども青少年部次長	櫻井 聡	
9	都市整備部次長	金子 泰久	
10	市民医療センター参与	中川 幸子	
11	教育委員会事務局次長	熊谷 尚慶	
12	危機管理防災課長	熊木 智洋	

任期：2017年7月28日～2018年3月31日

### 3. 町会・自治会アンケート調査票

(町会・自治会名) \_\_\_\_\_

問1 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者(ボート関係団体)と関わる機会  
はありますか?当てはまるもの一つに○をつけてください。

- |       |           |       |
|-------|-----------|-------|
| 1. ある | 2. 以前はあった | 3. ない |
|-------|-----------|-------|

※「ない」と回答した場合は問6へお進みください。

(問1で「1.」又は「2.」を回答いただいた場合、お答えください。)

問2 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者(ボート関係団体)とどのくらい  
の頻度で関わりがありますか?当てはまるもの一つに○をつけてください。

- |            |             |            |
|------------|-------------|------------|
| 1. 月1回以上   | 2. 3か月に1回程度 | 3. 半年に1回程度 |
| 4. 1年に1回程度 | 5. 数年に1回程度  | 6. 現在はない   |

(問1で「1.」又は「2.」を回答いただいた場合、お答えください。)

問3 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者(ボート関係団体)とどのような  
関わりがあります(ありました)か?当てはまるものすべてに○をつけてください。

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. (宿泊先として)会館の貸出     | 2. (会館貸出時における)地域の案内  |
| 3. (会館貸出時における)交流会の開催 | 4. (ボート大会等)応援イベントの開催 |
| 5. 共同イベントの開催         | 6. その他 ( )           |

(問1で「1.」又は「2.」を回答いただいた場合、お答えください。)

問4 貴町会・自治会では、戸田ボートコース利用者(ボート関係団体)とどのような  
きっかけで関わりを持ちましたか?当てはまるものすべてに○をつけてください。

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1. 昔からの付き合い      | 2. 大学や団体側からの問合せ   |
| 3. 貴町会・自治会からの声掛け | 4. 日本ボート協会などからの紹介 |
| 5. 市からの依頼        | 6. その他 ( )        |

(問1で「1.」又は「2.」を回答いただいた場合、お答えください。)

問5 貴町会・自治会と関わりのあるボート関係団体(大学や民間企業)はどこですか?  
具体的な団体名を教えてください。

--

(全ての方がお答えください。)

問6 今後、戸田ボートコース利用者(ボート関係団体)とどのような関わり方を考えていますか?当てはまるものすべてに○をつけてください。なお、既に関わっている場合は、問3の回答以外に該当があれば、当てはまるものに○をつけてください。

1. (宿泊先として) 会館の貸出	2. (会館貸出時における) 地域の案内
3. (会館貸出時における) 交流会の開催	4. (ボート大会等) 応援イベントの開催
5. 共同イベントの開催	6. 今後は関わりを持ちたくない

アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。

#### 4. 職員アンケート調査票（庁内ネットワーク利用）

（見出し）

戸田ボートコース等の利用に関するアンケート調査

（依頼文）

まちづくり戦略会議では、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とする「ボートのまち」の未来を見据えたまちづくりに関して研究を進めています。今回、職員の戸田ボートコースやボート競技関係者との関わり等について調査を行うことで、今後の研究に生かしていきたいと考えています。

つきましては、アンケート調査にご協力をよろしく申し上げます。

（調査内容）

問 1：あなたの性別について（必須）

当てはまるものを一つ選択してください。

男性 女性

問 2：あなたの年齢について（必須）

当てはまるものを一つ選択してください。

19 歳以下 20～29 歳 30～39 歳 40～49 歳 50 歳以上

問 3：あなたのお住まいの人数について（必須）

当てはまるものを一つ選択してください。

1 人 2 人 3 人 4 人 5 人以上

問 4：（子どもが同居されている場合のみ）一番小さい子どもの年齢について

同居している場合、一番小さい子どもの年齢をお答えください。

問 5：あなたのお住いの場所について（必須）

当てはまるものを一つ選択してください。

戸田市内 蕨市・川口市 その他県内自治体 都内自治体 その他

問 6：過去 1 年間のあなたの戸田公園（戸田ボートコース）の利用状況について（必須）

当てはまるものを一つ選択してください。

利用した 利用していない

問 7：（問 6 で「利用した」と回答した場合のみ）利用頻度について

当てはまるものを一つ選択してください。

月 1 回以上 3 か月に 1 回程度 半年に 1 回程度

1 年に 1 回程度 その他

問 8 : (問 6 で「利用した」と回答した場合のみ) 利用した目的について  
当てはまるものをすべて選択してください。  
仕事 ボート競技の実施 ボート競技観戦 公園利用  
花見 その他

問 9 : (問 8 で「その他」と回答した場合のみ) 利用した目的について  
その具体的な内容についてお答えください。

問 10 : (ボート関係者と関わりのある場合のみ) ボート関係者との関わりについて  
関わりがある場合、その具体的な内容についてお答えください。

問 11 : あなたの戸田ボートコースやボート競技への愛着について (必須)  
当てはまるものを一つ選択してください。  
ある 少しある あまりない ない わからない

問 12 : 戸田ボートコース利用増やボート競技への愛着心の向上に必要な取組について  
あなたの考える具体的な内容をお答えください。

問 13 : 過去 1 年間のあなたの彩湖・道満グリーンパークの利用状況について (必須)  
当てはまるものを一つ選択してください。  
利用した 利用していない

問 14 : (問 13 で「利用した」と回答した場合のみ) 利用頻度について  
当てはまるものを一つ選択してください。  
月 1 回以上 3 か月に 1 回程度 半年に 1 回程度  
1 年に 1 回程度 その他

問 15 : (問 13 で「利用した」と回答した場合のみ) 利用した目的について  
当てはまるものをすべて選択してください。  
仕事 スポーツの実施 スポーツ観戦 公園利用  
バーベキュー その他

問 16 : (問 15 で「その他」と回答した場合のみ) 利用した目的について  
その具体的な内容についてお答えください。

問 17：(彩湖・道満グリーンパーク関係者と関わりのある場合のみ)  
彩湖・道満グリーンパーク関係者との関わりについて  
関わりがある場合、その具体的な内容についてお答えください。

--

問 18：あなたの彩湖・道満グリーンパークへの愛着について（必須）  
当てはまるものを一つ選択してください。  
ある 少しある あまりない ない わからない

問 19：彩湖・道満グリーンパークの利用増や愛着心の向上に必要な取組について  
あなたの考える具体的な内容についてお答えください。

--

以 上

## 5. 会議でのボートに関連する主な発言

No.	会議名・発言内容
1	<p>第3回戸田市自治基本条例検討市民会議（2013年5月）</p> <p>「戸田市はどんなまち？戸田市のよいところ（強み）は？」のグループワークにおいて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観光資源がある（ボートコース全国区・道満グリーンパーク・つりぼり）</li> <li>・公園や緑が多い（河川敷・ボートコース（道満））</li> </ul>
2	<p>平成29（2017）年度第2回スポーツ推進審議会（2018年2月）</p> <p>一般向けのボート教室について、開催時間が遅い等の理由により参加率が低いことがあるため、参加しやすい時間に開催できるようにしてほしい。</p>
3	<p>平成28（2016）年度第1回スポーツ推進審議会（2016年8月）</p> <p>「ボート」と「レガッタ」の違いについて市民に知られていない（ボートが市民に浸透していない）ため、PRが必要ではないか。</p>
4	<p>戸田公園駅西口駅前地区のまちづくりを考える会（2017年11月）</p> <p>現状、駅に降りた際に、ボートをイメージできる街ではない。遠くからボートレースのイベントを見に来てくれる人がいるのに、歓迎の体制ができていない。そのような体制づくりもあっていいのではないか。</p> <p>例えば「ボートのまち戸田市」という横断幕が駅前にあれば、駅に降りた方が「戸田公園駅に来た」という気持ちになるのではないか。</p>
5	<p>戸田公園駅西口駅前地区のまちづくりを考える会（2017年11月）</p> <p>駅前に大きく目につくようなマップのようなものがあれば、戸田公園への行き方やボートのまちであることの宣伝等を示すことができ、戸田公園駅の魅力を少しでも伝えられるのではないか。駅に降りた人たちにも親切であり少なからず、また、「行ってみたい」と思う気持ちが自ずと湧いてくるのではないか。</p>
6	<p>第2回戸田市シティセールス戦略市民会議（2015年10月）</p> <p>戸田市の強みとして、戸田ボートコースが挙げられ、弱みとして「ボートのまち」としての認知度が低い。また、「ボートのまち」としてPRされておらず、情報発信力への課題がある。役所の封筒や書類に「ボートのまち」を入れるだけで印象が変わるのではないか。</p>
7	<p>第3回戸田市シティセールス戦略市民会議（2015年11月）</p> <p>ボート部の学生は、大学1年から3年の途中まで戸田市にいて、その後市外へと転出してしまう。また、ボート以外の戸田市の魅力を学生にも伝える必要がある。</p>
8	<p>第4回戸田市シティセールス戦略市民会議（2015年12月）</p> <p>サイクリングをしながら戸田ボートコースを巡れるまちがよい。また、戸田公園に大型カフェなどのシンボルを設置し、出店の増加や市民のボート利用できる工夫、町会・自治会対抗のボート大会の開催などの意見があった。</p>
9	<p>第5回戸田市シティセールス戦略市民会議（2016年1月）</p> <p>「ボートのまち」への意見として、様々な媒体にボートのイラストを掲載したり、駅からの道をわかりやすくしたり、ボートコースにおしゃれなカフェがあったりすると魅力が高まる。また、ご当地アイドル的なボートボーイズの結成や、ボート競技の解説付きのテレビ放送などもあるとよい。</p>

2017年度 戸田市まちづくり戦略会議 提言書

---

2018年3月

発行 戸田市まちづくり戦略会議（戸田市政策秘書室）

〒335-8588 戸田市上戸田1丁目18番1号

TEL 048-441-1800（内線）470

E-mail [seisaku@city.toda.saitama.jp](mailto:seisaku@city.toda.saitama.jp)

---